テレポーテーション・マン2

T「2129年・火星・東キャナル市」

○東キャナル市宇宙空港

ジョン・ダーウェル（76）農業学者
ステファニー・ミラン（32）医師
キャリー・ミラン（3）その娘
ジェシー・ダグラス（33）ステファニーの元恋人
岡田鉄男（32）テレポーテーション・マン）

およそ96年前からタイムスリップした5人、途方に暮れた表情．
保安官ライアン・ホール（39）と東キャナル市長メラニー・シングルトン（52）も戸惑う．

シングルトン「ほんとにあなたたちは百年近く前の過去から？
信じられないんだけど」

ホール「でも、市長、あのフェリーボートはまさしく百年前のモデルですよ。それなのにどこにも腐食がありません。新品ですよ」

シングルトン「そうよねえ」

ホール「なにがあったか、詳しく知りたいのですが」

そのときキャリーが頽（くずお）れる。

ステフ「キャリー！」

キャリー「ママ、疲れた」

ステフ「そうね。たいへんな目にあったからね。あの、この子を休ませられる場所はありませんか？」

と言いながら船内宇宙服を脱がせる。

ホール「ああ、これは気が付きませんで」

シングルトン「ホール、セントラル・ホテルにお連れして。詳しい話は明日」

ホール「はい、じゃ皆さんホバーにお乗り

ください」

全員乗り込む．

１０人乗りホバーは、フェリーボート

のそばから離れ、町の方向に．

○ホバーの中

全員、船内宇宙服を脱ぐ．

鉄男「上を飛んでいるのはドローンです

か？」

ホール「そうです．

地球の車の代わりです」

鉄男「なぜ車が走っていないのですか？」

ホール「車のタイヤの原材料が火星ではまだ

生産できないからです」

鉄男「へえー」

ホール「では、皆さんのお名前を教えてくださ

さい．

資料を作りますから」

○セントラル・ホテル駐車場

ホバーが停まる。

○セントラル・ホテルのホール
保安官の誘導でホテルのエントランス
から入ってくる6人。
さらにレセプション・デスクに。
ホテル支配人（47）「いらっしゃいませ」
ホール「この人たちの部屋を頼む」
支配人「承知しました。
部屋数は？」
ホール「（振り向いて）どうします？」
鉄男「二部屋お願いします。
（ステフ、ジェシー、キャリーを指して）
この家族に一部屋と、（ジョンと自分を
指して）私たちに一部屋」
支配人「承知しました。
（振り向いて鍵を2つ取り）203号室と
208号室です
そこの階段からどうぞ」
ホール「それじゃ私はこれで。

明日朝９時にお迎えに上がります」

ジョン「あぁ、ありがとう」

ホール「あ、それから火星に来た人がショックを受けることを、あらかじめお教えします.

火星のトイレにはトイレットペーパーがありません.

紙を作る木が育っていないからです.

お湯で洗浄後、温風で乾かしてください」

鉄男「ああ、それはご親切に。

（振り向いて支配人に）あの、食事はできますか？」

支配人「はい、右奥にレストランがあります」

ホール「あ、すべての支払いは市のほうから」

支配人「承知しました」

鉄男「ありがとう.

じゃあみんな、まず腹ごしらえだ.

フェリーボートではスープしか飲んでいないから」

ステフ「そうね、それがいい」

全員右に進みだす。

ロボット・ウェイターの案内で丸テーブルに。

○食堂

ウェイター「ご注文はそのタブレットでお願いします」

ジョン「どれどれ。

ふぅーん、そんなに品数はないなぁ。

ああ、なるほど。

ヨーロッパ料理、中東料理、アメリカ料理中華料理、日本料理・・・地域別で今日のメニューはそれぞれ一品づつ。

これじゃ作り残しや食べ残しはないな。

よく出来てる。

えーと、アメリカ料理は・・ホットドッグか、これはいい。

私はホットドッグと野菜サラダとビール。

みんなは？」

ジェシー「私もそれで。

ステフ、君は？」
ステフ「ホットドッグなんて4年ぶり．
私もそれにする．
キャリーも一緒ね」
鉄男「私に貸して」
タブレットを受け取る鉄男．
鉄男「あら、全部横文字だ．
さてと、おお、ジャパニーズメニューとあ
る．
OYAKODONBURI、親子どんぶりだ．
これはうれしい．
もういいですか」
みんなうなずく．
鉄男 ORDERボタンを押す．
しばらくして、食べ物が配膳ロボット
によって運ばれてくる．
鉄男、各人に皿を配る．
ジョン「さあ、頂こう」
ジョン、ビールの栓を開けて
ジョン「とにかく無事火星に着いたことを

祝って、乾杯！」

それぞれコップを掲げて唱和。

ジョン、ホットドッグにかぶりつく。

ジョン「やっぱりウィンナーは合成肉だね。
しかし良くできてる」

鉄男、どんぶりの蓋を取って、匂いを
嗅ぐ。

鉄男「すごい！　本物の鶏肉と卵だ」

ホットドッグを食べかけていたキャリ
ーが、その匂いに吊られて、

キャリー「ダディ、一口頂戴」

鉄男「えぇっ、だって日本料理だよ」

キャリー「いいから早く！　」

鉄男「しょうがないなぁ」

といって、丼とスプーンを渡す。

ひと匙掬って口の中に。

キャリー「ママ、おいしい！
私これにするわ」

ともりもり食べ始める。

鉄男、あきれ顔で

鉄男「参ったな。
仕方ない、そのホットドッグを」
キャリ「これ、食べるの？」
鉄男「そりゃあ食べるさ。
お腹減ってるもの」
キャリー「しょうがない、はい、どうぞ」
鉄男「しょうがないだって。
困った女の子だ」
ステフ「ごめんね」
鉄男「いいんです。
また次の時に食べるから」
ジョン「君は子供に甘いね」
鉄男「ええ、キャリーの言うことならなんで
も」

○ホテル２０８号室（夜）
鉄男、風呂から出てくる。
羽織っているのはパジャマ。
同じくパジャマ姿のジョン。
ジョン「おい、ウィスキーがあるぞ」

鉄男「ほんとですか」

テーブルのボトルを見付ける鉄男。

傍のコップに注いで水を注ぐ。

一口飲んで、

鉄男「この風味ははじめてだなあ」

ジョン「そりゃあ火星の酒だもの」

そのときドアが開いてキャリーが入ってくる。

キャリー「私ここで寝るからね」

鉄男「ええっ？

ママは知ってるの？」

キャリー「知ってるよ」

そのときまたドアが開いてステファが入ってくる。

ステファ「ごめんね。

言い出したら聞かなくて」

鉄男「いいですよ。

おねしょしないんだったら」

キャリー「おねしょなんかしないもん」

と、一人でベッドに潜り込む。

ステフ「じゃあね」
鉄男「お休み」
ステフ出てゆく．
ジョンと鉄男、顔を見合わせて笑う．
鉄男「じゃあ、これを飲んだら私も」
グイッとコップを空けて、キャリーの
側へ入る．
鉄男「ああ、この子もう寝てる」
ジョン「疲れてたんだなぁ」。
ジョンも酒を飲み干し、自分のベッド
へ．

〇東キャナル市庁舎（朝）
鉄男ら5人がホールに先導されて入っ
てくる．
ホール「今から一人づつ、タイムスリップし
た経緯をお聞きします．
少し時間はかかりますが」
ジョン「いいですよ」
ホール「じょあ、ダーウェルさんから．

あとの方たちはそこの椅子で」.

　　そこへ中東系の中年女性が近づいて来
　　る.

ラーム・カナル（36　人事課職員）
「ラーム・カナルと申します.
お待ちになっている間に、これからの
皆さんのお仕事についてお話しします.
あ、あの、コーヒーお飲みになりますか？」

鉄男「えっ、コーヒーあるんですか？」

カナル「ほんとのコーヒーではなくて、麦を
焙煎して粉末にしたものです.
コーヒー豆の栽培はやっと始まったばかり
です」

　　カナル、ポットの黒い液体を人数分の
　　陶器のコップに注いでゆく.
　　ジェシー、一口飲んで

ジェシー「うん、まさしく麦だ.
コーヒーによく似ている.
これ、百年前にも在りましたよね」

カナル「そうです.

では本題に．
古い資料から以前の皆さんのお仕事をを
知りました．
それに沿って新しいお仕事を割り振ります．
よろしいですか？」
　みんなうなずく．
カナル「昨日、皆さんの到着が伝えられてす
ぐに、人事配置の指令が届きました．
ご存じないかと思いますが、東キャナルは
まだ国の体（てい）をなしていません．
人口も、２万人しかいません．
国である必要はないのですが、住民の生活
を守るための組織は必要なため、徐々に
各機関が出来てきました．
農業、鉱業、建設業、各種製造業、インフ
ラ維持のための機関、医療、教育、通信・
交通の分野・・．
慢性的に人手不足の状態です．
ですから、皆さんにもどうぞお手助けを願
いしたいと思います．

では、ステファニー・ミランさん．明日からのお仕事は、この市庁舎近くの中央病院に勤務していただきますが、いかがでしょう」

ステフ「ええ、けっこうです．

あの、娘の幼稚園は・・・」

カナル「病院内に幼稚園が併設してあります」

ステフ「あら、そう．

それはありがたいわ．

それから、住むところは」

カナル「この近くにご家族用の住宅を確保してあります」

ステフ「まあ」

カナル「次はご主人のジェシー・ダグラスさん」

ジェシー「はい」

カナル「以前はパイロットでしたね」

ジェシー「はい」

カナル「ではやはり、空港に常駐してロケットや、大型ドローンの操縦をお願いします」

ジェシー「結構です.
ロケットはどんな頻度で飛ぶんですか?」

カナル「宇宙発電所や、マーズ・マグネタイザー号のメンテナンスに、そうねえ、年1回程かしら」

ジェシー「100年前の火星着陸はたいへん危険でしたが・・・」

カナル「火星に大気が出来て、しかも火星の重力は少ないから、地球よりは安全です」

ジェシー「なるほど」

カナル「最後に岡田鉄男さん」

鉄男「はい」

カナル「あなたについてのファイルは極秘扱いで、私もその内容は知りません.
内容を知っている市長との面談で勤務先を決めていただくことになります」

鉄男「わかりました」

カナルの手元のシグナルが点滅.
と同時にジョンが市長室から出てくる.

カナル「じゃあ、ダグラスさんと、ミランさ

ん、お入りください」

　二人はキャリーを連れて市長室へ。

　カナル、コップにジョンのコーヒーを注ぐ。

カナル「ダーウェルさん、麦コーヒーどうぞ」

ジョン「へえっ、ありがたい」

　と座って早速一口飲む。

ジョン「いいね」

カナル「あなたはコズミック・フード・サプライのCEOでいらっしゃいましたね」

ジョン「そうです」

カナル「やはり農業関係のお仕事をご希望ですか。

それともお年がお年ですから引退生活を‥」

ジョン「市長にも申し上げましたが、やはり農業ドームに関心があります。

ぜひそこへお願いします」

カナル「わかりました。

たぶんそうおっしゃるだろうと思って、お住まいはドームそばの戸建て住宅を手配し

　てあります」
ジョン「あの、テッツオの住まいは？」
カナル「それは市長との面談の後になります」
ジョン「へぇ」
　カナルのシグナルが点滅して、同時に
ジェシー、ステフ、キャリーが市長室
から出てくる．
カナル「じゃあ最後に岡田鉄男さん」
鉄男「はい」

○市長室

　横長のテーブルにシングルトン市長と
保安官ホール、あと二人座っている．
シングルトン「岡田さん、あなたの存在は、
百年前から、極秘扱いになっています．
NASAの指示で、あなたのファイルを見
ることのできるのは、私と、あとこの3人
だけです．
右の方は、東キャナル市市議会議長のクリ
スティン・コートニー．

隣は東キャナル大学学長で物理学者のダニエル・アルメンダリス」

アルメンダリス「前に入っていただいた方から、あなたの特殊能力によってマーズ7号の乗員が助けられたことは伺いました。
なんとも不思議な話です」

コートニー「そしてあなたが時間と空間を折り曲げた結果、ここにこうしていることも」

シングルトン「それに間違いはありませんか」

鉄男「ええ、その通りです」

アルメンダリス「なにか体に変調は？　」

鉄男「ありません。
頭髪が真っ白になっただけです」

シングルトン「あなたの存在は、基本的にこれからも機密事項になります。
あなたの存在が広く知られると、市民の反応が予測できないからです。
単にスター扱いになるのならまだしも、なにか見当違いの思い込みをする人もあらわれるのではと」

鉄男「よくわかります．
よろしくお願いします」

シングルトン「それで、あなたの位置づけは
この３人でさっき相談した結果、危機管理
セクションに配属と決まりました．
よろしいですか？」

鉄男「危機管理セクションって」

シングルトン「市に重大な危険が差し迫った
時に活動する部署です．
これは命令ではなく、お願いです
実は、その危険な案件が一つ持ち上がって
います．
今は詳しく話せませんけど」

鉄男「わかりました．
問題ありません」

アルメンダリス「ありがとう、了承してくれ
て」

３人、鉄男と握手を交わす．

シングルトン「あ、それであなたの住むとこ
ろは、この市庁舎の中の個室になります．

あなたがマーズ8号の皆さんとの結びつきが強い事は存じていますが、危機に対して緊急に活動してもらうためです．まことにお願いしにくいのですが・・」

鉄男、しばらく考えて

鉄男「あの、やっぱりダーウェルさんと一緒に住みたいのですが．なにかあの人が実の父親みたいに思えて」

シングルトン「そうですか」

鉄男「それに連絡を下されば、一瞬でここに来ることができます．テレポーテーションで」

シングルトン「ああ、なるほど．そうですね．じゃそういうことにしましょう．いずれにしてもあなたの個室は設けます．誰にも悟られずにテレポートするために．それは、この部屋です」

立ち上がったシングルトンは隣の部屋のドアを開ける．

　　１６平方メートルほどの個室．
　　ベットが見えている．
シングルトン「シャワーにトイレもついてい
　ます」
鉄男「へえ」

○市長室の前

シングルトン「それじゃ、みなさん一緒に
市議会議場にまいりましょう．
　みなさんを紹介するためです」
カナル「その前に皆さんにお渡しするものが
　あります」
　　と、銀色に輝くものをみんなに配る．
カナル「携帯電話です．
　かつての地球のセルラーフォンとは違って
大きなモニターは付いていません．
通話専用の電話です．
従って、ＳＮＳなどのソフトはありません．
ＳＮＳによる多大な情報の無駄遣いが指摘
され、火星では採用されませんでした．

ＳＮＳで遊んでいるほどヒマではありません から．

皆さんの電話番号はすでに登録されていま す」

○東キャナル市議会議場

そこには２５人の役員が．

入った途端、拍手の嵐が起こる．

暫くしてシングルトン市長が両手でみ んなを静める．

シングルトン「皆さん、こちらが百年前の世 界からタイムスリップして来られた方々で す．

昨夜緊急の連絡でお知らせしたので、紹介 の必要は無いでしょう．

でも、お一人づつご挨拶を頂きたいと思い ます．

まず、ゼネラルドクターのステファニー・ ミランさん」

指名されたステファは演卓の前に．

ステフ「ミランです。ゼネラルドクターですから、浅く広く医療の心得はありますが、高度の治療施術の経験はありません。
これから皆さんにいろいろお教えいただきたいと思います。
どうぞよろしく」

　　会場から拍手が。

シングルトン「続いて、コズミック・フード・サプライの元CEO、ジョン・ダーウェルさん、どうぞ」

　　ジョン、演卓に両手をついて

ジョン「私は、世界の食糧生産に一生をささげてきた者です」

　　と、会場から

ハインツ・リッチマン（66・農業委員）「私は先生の（火星の食糧生産）という本を読んで勉強してきた者です。
まさか先生にお会いできるとは、思っても見ませんでした。

ほんとなら、もう亡くなっていらっしゃる
お年ですから」
会場から笑いがこぼれる．
ジョン「そのとおり．
私もびっくりしています．
ミラン医師のおっしゃったと同様、私の知
識も、古びたものでしょうから、皆さんか
らいろいろ教えていただきたいと思いま
す」
頭を下げて椅子に座る．
シングルトン「次にジェシー・ダグラスさん．
マーズ7号のパイロットでした」
ジェシー「ダグラスです．
精一杯がんばります．
どうぞよろしく」
シングルトン「有難うございました．
最後に岡田鉄男さんですが、彼についての
詳細は、後日お知らせします．
後は皆さんでご討議願いたいと思います」
シングルトンに促され、5人は会場を

後にする。

○3階屋上

続いて案内された屋上は、市内が360度一望できる場所。

シングルトン「さて、ここからは教育担当のアーリア・パドゥ（52　インド系の女性）が皆さんのお世話をします。生活でなにか疑問のある方は、遠慮なくおっしゃってください。じゃ、アーリア、どうぞ」

パドゥ「はい、みなさんどうぞよろしく。じゃあ、この展望台から見えるものからお話ししましょう。展望台と言っても、たった3階ですけどね」

鉄男「なぜ高層ビルがないのですか？」

パドゥ「火星の土地は広いので、高い建物を作る必要が無いのです。例外は、あのそばに見える塔ですが、あれは警察と消防の監視塔で、セルラーフォン

とテレビの送信塔を兼ねています」

ジョン「数階建ての建物のほうが、組織の情報共有に便利なのでは」

パドゥ「実は、その外にも理由がありまして。

それが建築材料のコンクリートの問題です。

コンクリートを作るには、セメントを作るための石灰石が必要ですが、火星にはそれがありません。

それで人間の血液のアルブミンがその代わりになるのですが、かといって人間から大量の献血を受けるのは現実的ではありません。

そこで、組み替え体ヒトアルブミンを作って、それと水と火星の土を混ぜてコンクリートを作るのですが、数階建てのビルを作るほどには、まだ強度が無いのです」

ジョン「ああ、なるほど、わかりました」

パドゥ「では、北に広がるドームの群れを見てください。

大小取り交ぜて250ほどあります。

北のアマゾニス湖の縁に連なっています．
東キャナルの食糧生産基地です」
ジョン「酸素があるのに．なぜまだドームを」
パドゥ「それは砂嵐のためです．
温暖化で氷が溶けだして、湖や川が出来て、
湿潤化が進んだのですが、南半球は地形の
せいでそれが遅れて、規模は小さいですが
まだ砂嵐が赤道を跨いで時々やってきます」
ジョン「肥料はどうしているんですか？」
パドゥ「さすが食糧学の権威ですね．
これは、ダーウェルさんが著書の中でおっ
しゃっている通り、人間の排せつ物を主に
使っています」
ステフ「それだけでは足りないんじゃや？」
パドゥ「ヒトが1日に作り出す排泄物は、大
小合わせて一人最低1．2Kgとして、2
万人で1日に24トン、これをまず脱塩し
て、さらに脱臭のため高温処理して、その
量は1日1．3トンになります．
このほか収穫した後の植物を腐葉土にして

います」

鉄男「植物の栄養にはそれだけでは足りないんじゃないですか？」

ジョン「それがそうじゃないんだよ．地球では食料増産のため、とてつもない量の肥料を使ってたんだが、それが深刻な環境汚染を引き起こしたんだ．人糞だけだと、なるほど生育には少し足りないんだけど、作物が実らないわけではない．

収量が少なくても、生育が遅くても、そのほうが長い目で見て安全なんだよ」

鉄男「へえ」

パドゥ「じゃ、降りて市内観光に出かけましょう」

4人は階段を下りて市庁舎の外へ．

○市庁舎前

一台のドローンが待機している．

カナルの案内で、10人乗りのドローー

ンへ乗り込む。

すぐ飛び立つドローン。

○ドローンの中

パドゥ「右下に十文字に交差している線路は
市内循環する路面電車で、長辺8Km、短
辺4Kmの楕円形の市内を8の字を描い
て運航しています。
その中央駅が、そこに見えている交差点。
左回り、右回りで走っていて、運賃は無料
です」

ドローンは右旋回。

パドゥ「主な公共施設は線路沿いにあります」

白い3階建ての建物に接近。

その中庭に着陸。

パドゥ「ここが中央病院です。
ミランさん、ちょっとご覧になりますか」

ステフ「ええ、ぜひ」

着陸したドローンから全員降りる。

○中央病院ホール
パドゥ「院長さんにお会いなさいますか、
　ミランさん」
ステフ「ぜひ」
　パドゥ、先導して全員を院長室へ．

○院長室
　机の前には一人の白衣の男．
パドゥ「ムベキ先生、皆さんがいらっしゃい
ました」
ジャーナ・ムベキ（55）「ああ、有名人のお
越しですね．
昨夜のニュースで拝見しました．
あなたがドクター・ミラン？」
ステフ「はい、どうぞよろしく」
　そのとき、あわただしく看護師の女性
が駆け込んでくる．
看護師「院長、生まれそうです．
しかも5人同時に！」
ムベキ「ああ、そりゃ大変だ．

あ、ミラン先生、出産にご協力いただけますか？」
ステフ「はい、わかりました。
ジェシー、悪いけどキャリーを頼める？」
ジェシー「任せておいて。
ここで待ってるから」
ステフ「じゃあ」
ステフ、院長に続いて部屋を出る。
パドゥ「いやいや、初日から大変だ。
みなさんどうなさいます？」
ジョン「私はぜひ農業ドームを見ておきたい。
いいかね。テッツオ」
鉄男「はい」

○北の農業ドーム群そばの着陸場
ドローンから降りてくる3人。
パドゥ「最初にダーウェルさんの家を」
パドゥ、先導して、一軒の家へ。
平屋の黄色い家。
家の東側の玄関には5 7 8というナン

バーが書かれている．

パドゥ「家の位置はお分かりになりましたね．中は後でゆっくりご覧になってください．これが鍵です」

と、２本の鍵をジョンに．

歩き出すと、ドーム群近くの路面電車から、たくさんの人が降りてくる．

ジョン「何があるんだろう．こんなにたくさんの人」

そこへ一人の男が駆け寄ってくる．

リッチマン「ああ、先生、よくいらっしゃいました！」

ジョン「ああ、さっきの・・・」

リッチマン「リッチマン、ハインツ・リッチマンです」

ジョン「ああ、はいはい」

リッチマン「農業委員をしております」

ジョン「ああ、そうなんですか」

リッチマン「先生、ぜひこのドームからご覧になってください」

と言ってドームのドアを開く。
パドゥ「私はこれで失礼します。
御用の節は電話で」
ジョン「ああ、どうもありがとう」

○オリーブドームの中
ジョン「おお、これはオリーブの木！」
リッチマン「そうです。
種から育てたオリーブの畑です」
ジョン「そりゃあ、苗を運んでくるわけには
いかないよなあ」
リッチマン「このドームは高さが5メートル
で、ドームの中でも低いほうです」
ジョン「そうか、全部おなじ高さじゃないん
だ」
リッチマン「低いほうがドームの修復もやり
やすいですから」
ジョン「他に低いドームというのは？」
リッチマン「野菜やコーヒー豆の木や果物の
木。

バナナも高さの低い品種を選んで地球から持ってきました」

3人は畝に沿って進んでゆく．

と、目の前に直径40Cmの筒が地面から突き出ている．

ジョン「この筒はもしかしたら」

リッチマン「そうです．地底の氷を溶かした水蒸気を噴き上げるものです」

ジョン「いつも使うのかね」

リッチマン「火星も雨が降り始めましたが、まだまだ足りないので、水分が足りないときに地中から水蒸気を噴き上げます．これによって夜や、冬場の低温対策にも使っています」

ジョン「それは一石二鳥だね．だけど、湿気が多いと根腐れを起こすよね」

リッチマン、得意満面の笑みを浮かべる．

リッチマン「そこが一番難しいところで、温

度・湿度調節は、水蒸気と電熱ヒーター併
用で、一番植物の生育に適した条件をＡＩ
コンピューターが管理しています」

ジョン「あの、そうして地中の氷を溶かして
いると、ドームの地盤沈下が起こりゃしな
いかね」

リッチマン「それです。
もう１００年近くもこのシステムで、少し
ずつドームが沈下しています。
古いものから移築しています、
さて、次はこちらへ」

隣のドームに続くドアを開ける。

○小麦のドーム

かなり広いドームのなかに、ビッシリ
と小麦が育っている。

ジョン「懐かしい匂いだ。
私の家は代々小麦農家だったんだ」

リッチマン「そうですか」

ジョン、収穫期の麦の穂を一つ千切っ

て、麦を一粒口の中に．
ジョン「うん、良く育ってるね．
もう刈り取りだろう？」
リッチマン「ええ」
ジョン「この後、何を作るんだい？」
リッチマン「ここに稲を作ります」
ジョン「テッツォ、どうだ、安心したろう．
米が食べられるぞ」
鉄男「分かってましたよ、昨日の親子丼で」
ジョン「ああ、そうだったか．
小麦のドームはこれだけじゃないよね」
リッチマン「もちろんです．
全部で100近くのドームで作っています．
なにしろ2万人の主食ですからね」
ジョン「あの、さっきから気になっているん
だが、あの表の大勢の人たちは何かね」
リッチマン「ああ、あれね．
今日は東キャナル・スポーツ大会の初日な
んですよ」
ジョン「スポーツ大会？」

リッチマン「移住が始まって10年してから、移住者の心のケアが大問題になって、それの解消法として、スポーツを取り上げたのです．
行ってみますか？」

ジョン「ぜひ」

○スポーツ・ドーム

両開きの大きな扉を開くと、階段状の客席から大歓声が途切れなく．

リッチマン「こちらへどうぞ」

階段を上まで登り、空いている席に、二人を座らせる．

円形のトラックでは、50人くらいの人々が走っている．

鉄男「あれは競歩ですか」

リッチマン「いいえ、5Kmマラソンです．それ以上のマラソンは火星人には危険なのです」

鉄男「やはり、体格の問題ですか」

リッチマン「ええ、そうです。
それと、現在の大気の成分に、二酸化炭素が少し多いからです。
地球では二酸化炭素は0.03%ですが、ここ火星では9%もありますから」

ジョン「真ん中のコートではテニスとバドミントンだね」

リッチマン「火星の球技の代表格ですね。
ただし、テニスの球も、バドミントンの羽根も、地球に比べると、少し重くなっています。
重力がすくないので、地球から来た人がすぐゲームすると、はるか彼方まで球がとんでいってしまうからです」

鉄男「このほかの球技は？」

リッチマン「あと、ピンポンぐらいですかね」

鉄男「フットボールやラグビー、サッカー、野球なんかはどうですか？」

リッチマン「それらは、禁止されています。
火星人の筋肉も骨の太さも十分ではなく、

当初たくさんの怪我人が出ましたから」

ジョン「火星人というのは、何世代も経た地球からの移住者のことだね」

リッチマン「ええ、その通りです」

と、そのときトラックでは、アフリカ系の選手がゴールして大歓声に包まれる。

3人とも盛大な拍手を送る。

鉄男「格闘技は？」

リッチマン「これも危険なので禁止されています」

鉄男「そうでしょうね。質問ばかりでごめんなさい。水泳は？」

リッチマン「アマゾニス湖の、氷の解けた水には、人体に有害な成分があります。農業用水や水道水は、それらを除去してありますが、湖はそのままです。ですから泳ぎたい人は、酸素ヘルメットを被って泳ぎます」

鉄男「そりゃぁ大変だ」
リッチマン「地球のダイビング・スーツを着て、重りを付ければ潜れますが・
スーツの素材がまだ完成していないので、
地球から持ち込んだ少ないスーツだけで」
ジョン「しかし面白い」
リッチマン「先生、次はどのドームをご覧になりますか？」
ジョン「野菜のドームを見せてくれませんか」
リッチマン「ええ」
と、そのとき鉄男の携帯が鳴る。
鉄男、携帯を喉の翻訳機に。
鉄男「え？
はい、わかりました。
じゃ、すぐに。
ジョン、呼出が掛かりました。
市庁舎へ帰ります」
ジョン「おお」

〇市庁舎通信室

部屋には、市長、保安官、危機管理主
幹が集まっている。
そこへドアを開けて鉄男が現れる。
ローリン（53）「岡田さん、よく来てくださ
いました。
危機管理主幹のローリンです」
鉄男「はい、どうぞよろしく。
一体何なのですか。緊急呼び出しって」
そこへ総髪撫で付けの一人の東洋人が、
女性を伴って、入ってくる。
着流しに帯を巻いて、その腰には脇差
を帯びている。
まるで日本の時代劇から抜け出たよう。
ローリン「岡田さん、この方は小太刀の名手、
杉田龍之介（72）先生です。
そちらの女性は奥様の静（しず）さん。
杉田先生、こちらが特殊能力を持っている
岡田鉄男さんです」
鉄男「岡田です。
どうぞよろしく」

杉田「うむ、左様か」

ローリン「え、なんとおっしゃったのですか・
よくわからない言葉ですが」

鉄男「ああ、そうですかとおっしゃいました・
古い日本語です」

ローリン「自動翻訳器ではだめですね・
岡田さん、折々に翻訳をお願いします」

杉田「愚か者めが・
英語ぐらいしゃべれるわい」

ローリン「そうでしたか・
それは失礼を・
では早速今日の要件をお話しします・
お二人とも、ロシアの独裁者イワン・ドブゾロフのことはご存じですね」

鉄男「はい」

ローリン「実は今から5か月前に、ドブゾロフの兵が、出発間近のマーズ51号に侵入して占拠しました・
その時は船長ら6人の乗組員だけが乗船していたのですが・・・・

その経緯は、51号のビデオ記録を編集し
ましたのでご覧ください」

○マーズ51号・ホイール操縦室（コックピット）

船長（コマンダー）渡辺浩一（35）
その妻・春（35）
パイロット　ニック・フォード（アイルランド系・29）
その妻タマラ（ラテン系・30）・医師
メカニック　ロベール・ヴァルツ（欧州系・33）
その妻アナベル（アフリカ系・30）・ナビゲーター

船長「資材の積み込みも終わったし、あとは移住者が乗り込むだけだ・
乗り込みは1週間後だな」
タマラ「地球の気象条件が良ければ」
船長「そうだね」
そのとき通信回線が開く・
ISS3（国際宇宙ステーション3）「緊急警

報です。
そちらマーズ51号に、ドブゾロフのシャトルが接近しています。
一昨日打ち上げられたものです。
何の声明も出ていませんが、十分注意してください。
お判りになりましたか？」

船長「判りました。
ご連絡有難うございました」

スイッチを切る船長。

船長「アナベル、カメラとレーダーをチェク」

アナベル「はい」

彼女はカメラを旋回させる。

アナベル「あ！　います！　あそこです。
距離20km、こちらに接近しています」

ロベール「いったいどういうつもりだ。
衝突したら大ごとだ」

船長「恐れていたことが・・・」

○マーズ51号着陸船先端

ドブゾロフのシャトルが近づいて来る．100mほどの位置でシャトルのエアロックが開き、宇宙服をまとった一人の人間が、出てくる．

エアーをふかしてマーズ51号先端のエアロックに接近．

続いて、シャトルから伸びるロープの先端を取っ手にテザーで固定

すると、シャトルから大きな荷物を持った2人が、ロープを伝ってきて、すでに開かれたエアロックに侵入．

エアロックが閉じる．しばらくして再び隔壁が開き、さらに到着した3人が．

こうしてもう一回侵入が続き、計9人が入り込む．

○ホイール操縦室

ニック「なぜあいつらは、エアロックの開け方を知ってるんだ？

関係者以外知らないはずなのに」

船長「火星協会に内通者がいるのかも．
たいへんだ．
隔壁をロックしないとここにも入ってくる．
ニック、ロベール、できるだけ遠くの部屋
まで行って、レバーのロックを掛けてきて
くれ」

聞くなり2人はとび出してゆく．

静「あなた、ここのスポークの入口のレバー
のロックも！」

船長「おお、そうだ！」

着陸船に通じている天井のスポークへ
の昇降台に乗り、スイッチを入れる．
そして天井寸前で止める．
隔壁のレバーのロックを掛ける船長．

船長「ふぅー」

○ホイール・ルームC

ロベール、入って来るなり、隣の資材
庫への隔壁へ駆けつけ、隔壁を開く．

途端に医務室から資材庫へ、黒衣の

ロシア兵が入ってくる。

すぐさま隔壁を閉じ、レバーを倒して

ロックを掛ける。

隔壁を叩くロシア兵の叫び声。

素早く部屋を出るロベール

○ホイール操縦室

左右の隔壁からニックとロベールが戻

ってくる。

船長「確かにロックを掛けたか？」

ニックとロベールうなずく。

ロベール「ギリギリでルームCを閉じました」

ニック「私もルームEまででした」

船長「これでひとまず安心だ。

さて、これから連中がどんな手を打ってく

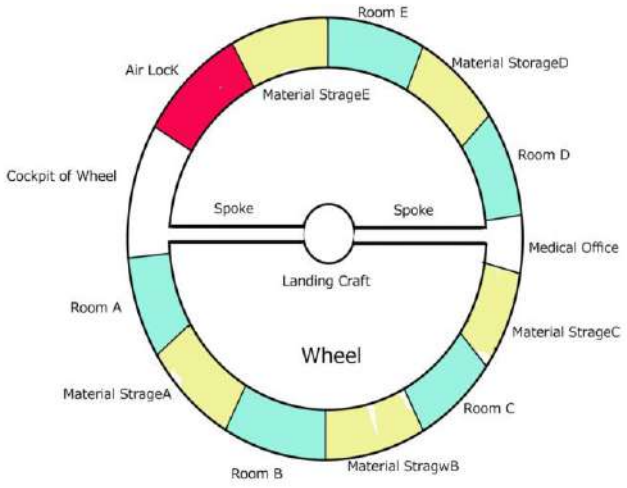
るか」

船長、船外カメラのスイッチを入れ、

着陸船の先頭を観察。

船長「シャトルとマーズ51号を結んだロー

プは解かれている．
これが繋がっていると、マーズ号にぶつかって大変なことになるところだった」



そのとき、船内の連絡通信が開かれ、着陸船の操縦室が画面に．
髭を蓄えた男が画面に．
イワノビッチ「私はドブゾロフ宇宙軍の小隊長イワノビッチ（39）だ．
たった今貴船を乗っ取った．

隔壁を開き、おとなしく投降しろ．
危害は加えない」
船長「あなたの行為は、世界宇宙条約違反だ．
従うつもりはない．
即刻この船から退去せよ」
イワノビッチ「そうか．
まあいい．
いずれにしても、5か月後にはこの船は火星に着き、我々は着陸船で火星に降りて、東キャナルを攻撃する．
なんの武装もしていない東キャナルは、一たまりもないだろう．
君たちはこの船から見物していてくれ」
いったん通信が終わったのち、船長はAIコンピューター「リンカーン」との通信回線を開く。
リンカーンのカメラが敵の操縦室内部を映し出す。
イワノビッチ「諸君、聞いての通りだ．
連中には武器は無い．

反撃してきたら、腰のナイフで殺せ．
くれぐれも拳銃は使うな．
このマーズ号は、我々ドブゾロフの戦艦に
なるから、壊してしまっては元も子もない．
火星に着いても、武器は拳銃とナイフだけ．
火星の連中も、武器は何もない．
わかったか」

全員での応答する声．

イワノビッチ「ルームCとルームEの前に、
二人づつ見張りに立て．
12時間で交代だ．
すぐ掛かれ」

船長、通信スイッチを元から切断．

船長「困ったことになった．
まず火星基地に連絡だ」

○東キャナル市・市庁舎・通信室

その場の全員、沈痛な面持ちで聞いていた．

シングルトン「そう言う訳で、岡田さん、あ

なたをお呼びしました・

イワノビッチの言ってる通り、我々には武器はありません・乗り込まれたら防ぎようがありません」

鉄男「NASAはどう思っているのですか、このことを」

ローリン「突然の事で、戸惑っております・マーズ号を壊すことは論外だし、我々乗組員の命も大切だし・・・・それで少し様子を見ることに」

鉄男「少し様子をって、もう5か月過ぎてるんでしょ・一緒に飛行するはずのもう一隻のマーズ号母船は？」

ローリン「前回の飛行で、火星に着いてからホイールの回転部分に異音が生じ、危険なため、マーズ51号の修理部品を待っている状況です」

鉄男「ええっ！」

ローリン「そこで、岡田さん、あなたの力で

連中を排除できませんか？」

鉄男「うーん．

テレポーテーションで身をかわすことは、容易いですが．

それから9人もの兵士を、どうやって倒すか・・・・．

体格から見て、はるかに私より強そうだ」

ローリン「体の大きさは、さほど脅威になりません．

というのも、彼らは5か月の宇宙生活で骨も筋肉も細くなっていますから」

鉄男「それを言えば私だって」

ローリン「あなたは2か月ちょっとだけですから、彼らほど弱っていない」

鉄男「それにしても彼らは殺しの集団」

ホール「それで、杉田先生をお呼びしました．

彼は日本の古流の小太刀の達人です．

先生に小太刀を教えてもらって、マーズ号へテレポート願えませんか？」

鉄男「火星には、格闘技の選手だった人はい

ませんか？
脇差だけでは・・・」
杉田「馬鹿もん！
小太刀を何と心得おるか．
小太刀は、宇宙船の様な狭い狭間の戦いに
は向いておる．
そなたが行かんのであれば、わしが行く」
静「あなた、それは・・・」
杉田「なんだ、不服か」
静「あなたはお年ですし・・・」
杉田「年など関係ない．
義を見てせざるは勇なきなりと申すではな
いか．
ここで立たねば男ではない」
ホール「まあまあ、ご意見はそこまでに．
先生、なんとか岡田さんを鍛錬してそこそ
この腕に仕上げることは・・・」
杉田「わしが師範になるには20年かかって
おる．
5か月ではどうにもならん」

ホール「先生、さっきのは5か月前の録画です．
マーズ51号はあと12日でここへ」

杉田「なんと！
それをはじめに言え！」

ホール「すみません」

しばらく沈黙が続く．

鉄男「先生、いろいろご不満もおありでしょうが．ひとつここはご承知いただいて、
私を弟子にしてください．
ホールさん、時間の余裕はどれほど」

ホール「今、救援の火星シャトルの打ち上げ準備をやっています．
これに3日かかります」

杉田「3日・・・」

静が鉄男の傍へ来て耳打ちを．

静「主人は火星に来てから、自分は江戸時代の侍と思い込む病に罹っております．
ですから、あなたも時代劇の武家言葉を使えば、主人はたぶん承知すると思います」

鉄男「（小声で）はい、判りました．
（杉田に向かって）殿、お願いでござりま
す．
拙者を弟子にお加えくださいませ」
杉田「なに、拙者と申したか．
そちは武門の生まれか」
鉄男「左様にございます」
杉田「左様か．
それならば話は早い．
では、早速今から鍛錬に臨もうぞ」
鉄男「はは！」
一同安堵（あんど）の表情．

○杉田家の家の前の草原

杉田は両手に小太刀を2振り．
1振りを鉄男に持たせる．
杉田「どうだ、重さは」
鉄男「はあ」
杉田「はあとはなんだ」
鉄男「他に似たようなものを持った覚えがあ

りませぬゆえ、なんとも」

杉田「左様か。

そうであろうのう。

まこと太平なる世に生まれた故にのう。

重さは千六百匁、長さは1尺半」

鉄男「はあ？」

杉田「そうか、判らんか。

およそ500gの50cmじゃ。

それを腰に差してみい」

鉄男、ベルトに差す。

杉田「揺すってみい」

鉄男、言われた通り揺する。

杉田「抜け落ちそうじゃのう。

本来ならば、帯に差しておったが、今様の

滑らかなベルトでは、安定せん。

おい、静、帯を持って来てやれ」

静、家の中に戻り、やがて一本の帯を。

それを鉄男の腰に締めてやる。

静「これからは自分で締めるんですよ」

鉄男「奥方様、かたじけのうございます」

静「あなた、慣れてきわねぇ」
と笑う．
杉田「よし、それでは鍛錬用の模造刀に履き
替えよ」
と、そばのベンチにあったプラスチックと思しいひと振りを手渡す．
それを腰に差す鉄男．
杉田「抜いてみい」
鉄男柄を握って刀身を抜くこうとする．
なにか引っ掛かりがあって、すぐには抜けない．
杉田「刀を抜くにも作法がある．
その小太刀は鯉口のところで締めてあって、スウッとは抜けない．
そなたは右利きか？」
鉄男「はい」
杉田「左様か．
ならば左手で鯉口を握り・・」
鉄男「鯉口とはなんでありますか」
杉田「なに、鯉口も知らんのか．

参ったのう.

鯉口とは、刀が抜き差しされるところじゃ.

そう、そこじゃ.

そこでこれから立ち合いというところで、

左手の親指で鍔を前に押し開く.

これを鯉口を切ると言う.

こうして刀が滑らかに抜けるのじゃ.

やってみろ.

おう、そうじゃ.

刀を収めるにも作法があるが、今はそれは

言うまい.

賊の短剣の使い方は大まかに言って2種類

ある.

一つは、刀を両手で握って腰に溜め、勢い

をつけて向かってゆき、相手の腹に突き刺

す手口.

これは処しやすい.

何故なら、動きが容易に読めるからじゃ.

どれ、わしと交代してみよう」

と、近づき、手に持ったナイフの模造

品を鉄男に持たせ、自らは、鉄男の
小太刀を腰に佩く．
杉田「刀を腰に構えて、わしに突きかかって
こい」
鉄男、深呼吸して、ナイフを腰に構え、
猛然と突きかかってゆく．
杉田の体に触れる直前、杉田の姿が
消え、気づいた時には、鉄男の右ひじ
に小太刀の刃が．
杉田「判ったか、この動きが」
鉄男「は、いや」
杉田「わからんか．
そうか．
それでは、もう一度ゆっくりかかってこい」
鉄男、もとの位置に戻り、今度はスロ
ーモーションで杉田に向かう．
すると、杉田は寸前に右に一回転して
鉄男の傍に来て、肘に刃を当てる．
さらに杉田はもう一回転して、左の肘
にも刃を当てる．

杉田「わかったか．
これを花鳥輪舞の小太刀という．
要は間合いを詰め、体を回転させて、相手の目をくらますのじゃ」
鉄男「ああ、なるほど．
分かり申した」
杉田「では、今度はわしが攻撃する．
見た通りやってみい」
鉄男「ははっ」
両者、得物を交換して、今度は
杉田が襲い掛かる．
寸前、鉄男の体も回転して、相手の
肘を襲い、間を置かずもう一回転して
反対の肘も．
杉田「やあ、これは驚いた．
そなた、武芸の心得があるのか？」
鉄男「中学時代に、少々合気道を」
杉田「なるほど．
合気道は、相手の体にすり寄って回転して
相手を抑える武術、納得したぞ．

これなら、話が早い。
今日はこればかり鍛錬しょうぞ」

鉄男「ははっ、有難き倖せ」

こうして練習は続くが、双方ともに
5分程すると息が切れ、その都度
ベンチで休み、また続ける。

○同（夕方）

こうして3時間ほどすると、陽も暮れ
なずみ、静が出てくる。

静「あなた、もう夕餉(ゆうげ)の時間ですよ。
おやめなさいませ」

杉田「おう、もうそんな時間か。
よし、岡田、一緒に夕餉じゃ」

鉄男「それでは余りにもったいのうございま
す。
わたくしめは、これにて退散いたしまする」

杉田「馬鹿なことを申すな。
そちとわしの中ではないか」

静「そうですよ。

もう3人前作ってしまいましたもの。
さあ、どうぞ」
鉄男「やあ、これはかたじけのうございます。
造作（ぞうさ）をかけて申し訳なく存じまする」

○杉田の家の居間（夕方）

江戸好みの杉田にしては、モダンな造りの居間。
さすがに床の間と思しき壁に書が掛かり、その下に花瓶に一輪の花。

静「あなた、湯あみをなさいませ。
汗びっしょりですよ」
杉田「そうか、それでは」
と部屋を出てゆく。
静「岡田さん、江戸言葉が身についていますのねえ」
鉄男「テレビでよく時代劇を見ていましたから。
でもほんとに江戸時代はこんなしゃべり方だったのでしょうか」

静「わたしにもわかりません．

ちょっと料理を運んできますね」

鉄男「ああ、お手伝いします」

静「そうお、じゃ、そこのキッチンの料理を机に」

鉄男「はい」

と、そのとき鉄男の携帯電話が鳴る．

鉄男「あ、ちょっと失礼」

とその場を離れる．

鉄男、電話を喉の自動翻訳器に当てる．

アモンディ（幼稚園園長　49）「あの、キャリーちゃんのお父さんでいらっしゃいますか？」

鉄男「え、ああ、ええ、まあ」

アモンディ「すみませんが、キャリーちゃんのお迎えお願いできますか？」

鉄男「ええ？」

アモンディ「お母様は、今手術の執刀中で、ダグラスさんは緊急の呼び出しで・・・」

鉄男「ああ、そうですか．

はい、判りました。
すぐ伺います」

鉄男、食卓に近づき、
鉄男「奥方様、すみません。急な用で戻らないといけません」
静「まあ、あの戻ってこられますよね」
鉄男「さあ」
静「戻ってきてくださいね。でないと私が怒られます」
鉄男「はい・・・。戻ってきます。じゃあ」

○中央病院の入口のアルコーヴ（夕方）
突然現れた鉄男、そこを出て病院へ。

○病院受付
そこにはソファに座ったキャリーが。
傍には中年の女性が。

鉄男「どうも、すみません、岡田です」

アモンディ「え？　もう？」

鉄男「はい、近くに居ましたので」

キャリー「ダディ！」

　　鉄男の胸に飛び込んでくる。

アモンディ（55）「幼稚園園長のアモンディと申します」

鉄男「これはご丁寧に。あの、ミラン医師の執刀は長く続きそうですか？」

アモンディ「ええ、あと2時間は」

鉄男「そうですか。じゃ、仕方がない。彼女が戻ったら、岡田がキャリーを連れて帰ったとお伝えください」

アモンディ「はい、判りました」

鉄男「じゃあ」

　　鉄男、アモンディが向こうを向いたときにキャリーを抱いたままテレポート。

○杉田の家の前（夜）

突然現れる鉄男とキャリー．

扉をノックする鉄男．

扉が開いて静が現れる．

静「あっ！

早かったわねぇ」

鉄男「ええ」

静「そのお子さんは？」

鉄男「私はこの子の育て親なんです」

静「お若いのに育て親？」

鉄男「ええ、まあ、いろいろありまして」

キャリー「こんばんは」

静「まあ、ちゃんと挨拶まで．

さあ、入って」

○杉田家の居間（夜）

杉田が食卓に座っている．

杉田「おい、如何致した」

鉄男「はい、この子を迎えに行っておりまし

た」

杉田「その子は？」

キャリー「おじいさん、こんばんは」

静「岡田さんのお子さんですって」

杉田「おう、そうか．

まぁ二人とも座るがよい」

ニコニコと笑いかける杉田．

杉田「おい、もう一人前食事を」

静「判ってますよ」

と、キッチンへ．

やがて、もう1人前の料理をトレイに乗せて、持ってくる．

鉄男「奥方様、ほんに造作をお掛けします」

静「心配しないでいいのよ．

私もこんな小さなお嬢さんがいらっしてくれて、ほんとに嬉しいの」

杉田「そうだな．

年恰好から言えば、亡くなった娘と同じ年ごろだのう」

鉄男「お嬢様がいらっしゃったのでございますか」

静「ええ、火星に来てからすぐ亡くなりました．あの時は二人して三日三晩泣きとおしました」

杉田の目にも．うっすら涙が．

杉「（キャリーに向かって）名前は何という」

キャリー「キャリー・ミラン」

杉田「岡田じゃないのか」

鉄男「いろいろ仔細がございまして」

杉田「左様か、ならば聞くまい．さあ、食べよう」

キャリー「（鉄男に向かって）食べてもいいの？」

鉄男「うん、頂きなさい」

キャリー「頂きます」

といって、スプーンを取り上げる．テーブルには、卵焼きと、野菜のソテーと、豆腐の味噌汁とごはん．卵焼きを一口食べて

キャリー「まあ、おいしい！」

静「そお、それは嬉しいわ」
鉄男「そのスープも飲んでごらん」
キャリー「これ、ミソシルね」
静「へえっ、なんで知ってるの？」
鉄男「宇宙船の中で、フリーズドライの味噌
　汁を飲んでいましたから」
キャリー「あれよりずっと美味しいわ」
静「そりゃあそうよ．
　この味噌は自家製なんだもの」
鉄男「（一口すすって）ああ、本当だ．
　地球の味がする」
杉田「地球の味とは、大仰（おおぎょう）な物言いだのう．
　あ、忘れておった．
　岡田、まず一献」
　と、傍の銚子を取り上げて、鉄男の傍
　のコップに注ぐ．
鉄男「これは何でございますか？」
杉田「酒だ、火星の酒だ」
　言いつつ、自分のコップにも注ぐ．
杉田「そなた等が、無事火星に着いたことを

祝って、乾杯！」

鉄男「頂きまするる」

と二人してちびちびと酒を味わう。

鉄男「殿、懐かしい日本酒でござりまするなあ」

杉田「左様、懐かしいのう。地球にあれほどの異変が起こらねば、日本で楽しく飲んでおられたものを。まっこと人間は愚かじゃ」

キャリー「ダディ、ミソシルにごはんを入れてもいい？」

鉄男「それは・・・」

杉田「いいとも、いいとも。一刻も早く戦に駆け付けるには、ぶぶ漬け汁漬けは、武家の習いじゃによって」

静が笑っている。

テーブルの食品があらかた食べ終わる。

さらに徳利から酒が注がれる。

鉄男「殿、斯様に飲んでいては、酔っぱらってしまいまする」

杉田「よいよい。
　今宵は泊まって行け」
鉄男「そうは申されましても・・・」
　　そのときまたも鉄男の携帯電話が鳴る。
　　鉄男、電話を自動翻訳機に当てる。
ステフ「ステッツオ、遅くなってごめんね。
　今、手術が終わったの」
鉄男「ああ、そう。
　ご苦労様でした」
ステフ「じゃあ。キャリーを連れてきてくれ
　ない？」
鉄男「うん、わかった。
　今から帰る」
　　電話を切る鉄男。
鉄男「殿、この子の母親の仕事が終わりまし
　たゆえ、これにて失礼仕りまする」
杉田「まぁ、よいではないか。
　もう少し酒の相手を」
鉄男「まことに申し訳ありませぬが、これの
　母親が心配しております故」

静「殿様、無理を言ってはなりませぬ」

杉田「そうか、仕方がないのう。

明日の鍛錬には遅れるでないぞ」

鉄男「ははっ。

それでは、これにてご免」

キャリー「キャリー、殿様にさよならを」

キャリー「おじいさん、おばあさん、さようなら」

静「（キャリーの頭を撫でながら）また遊びに来てね」

キャリー「うん」

二人は玄関へ。

○杉田家の表（夜）

二人は杉田夫婦に黙礼してテレポート。

杉田「や！　なんじゃや、彼奴（きゃつ）は！

一瞬に消えよった。

さては甲賀か、伊賀か」

○病院前（夜）

現れる鉄男とキャリー．
院内へ入ってゆく．

○病院受付（夜）

ステフが駆け付ける．
ステフ「ごめんね、キャリー．
テッツオあなたも」
鉄男「いいんだ．気にしなくても．
ジョンが心配しているだろうから帰ります」
ステフ「そお、じゃまた」
鉄男「うん、あ、それから夕食は済ませてあ
るから」
ステフ「うん」
鉄男「じゃ」
人影が無いのを確かめてから、テレポ
ート．

○ジョンの家の居間（夜）

突然現れる鉄男．
ジョン「ああっ　驚いた．

戻って来るときは連絡してくれ．

心臓に良くないから」

鉄男「すみません、気を付けます」

ジョン「食事は？」

鉄男「杉田先生のところで頂いてきました」

ジョン「そうか．

いや、私もハインツのところでお呼ばれし

てね．

結構飲んだから、もう寝るよ」

鉄男「はい、じゃお休みなさい」

ジョン「うん」

と自分の部屋へ．

〇杉田家の庭（朝）

杉田夫婦が花壇の花を眺めている．

そのとき鉄男が現れる．

杉田「やっ、やはり妖術使いであったか．

岡田、その術どこで会得したか」

鉄男「殿、奥方様、お早うございます．

殿、これは妖術ではございませぬ．

テレポーテーションという瞬間移動でござ
ります」

杉田「そうか、伴天連(ばてれん)の術だったか」

鉄男「・・・まあ、そんなところにございま
す」

杉田「その術を使えば、小太刀の技とあいま
って無敵じゃぞ」

鉄男「殿、そううまくは参りませぬ。
昨日の鍛錬で、私めに機敏さの無いことを、
思い知らされました。
大のロシア人9名を倒す自信がございませ
ぬ」

杉田「いや、そうではない。
そなたには、一瞬一瞬を見極める力がある。
わしはそう見立てた。
心配することは無い。
さあ、鍛錬に励(はげ)もうぞ」

そのとき鉄男は杉田の総髪の真ん中の
禿げ頭をチラッと見て、少し笑ってし
まう。

杉田「お主、何が可笑しい．
わしの頭を見て笑ったであろう」

鉄男「いえいえ、そうではございませぬ．
今日の鍛錬を思って嬉しくなってつい」

杉田「そうか、そなたは正直な奴よのう」

そういって、ベンチの模造刀を渡す．

杉田「今日は、昨日とは違って、短剣をむやみやたらに振り回す相手の仕置きじゃ．
昨日は、腕の腱を断ち切る術だったが、
相手が動き回るときは、相手の動作が途切れた瞬間に急所を刺し貫く術じゃ」

杉田は、赤い点を複数描いたシャツを着て、

杉田「ここと、ここと、ここじゃ．
この位置を刺し貫け．
そうすると相手は体が麻痺して動けなくなる．
そこでナイフを打ち落とせばよい」

鉄男「殿、そう簡単には・・・」

杉田「何事も練習じゃ．

さあ、その小刀でかかってこい」
鉄男「では、御免」
と、小刀の模造刀を、やたらに振り回して掛かってゆく．
杉田、寸前で横に回転し、鉄男の動きが停まった一瞬、みぞおちの赤い点を突く．
はっと気づく鉄男．
鉄男「参りました」
杉田「なんのこれしき、さぁ来い」
鉄男、斜め十文字に切り付けてゆく．
杉田、右から左下に振り下ろされた短刀を持つ鉄男の右手首を締め上げ、喉元に小太刀を当てる．
鉄男「むむっ」
杉田「さぁ来い、さぁ来い」
鉄男「見参！」
鉄男、模造刀を、左から右、右から左と横に切り付ける．
左から右に切り付けた刹那、懐に飛び

込んだ杉田、右の脇に小太刀を当てる。

鉄男「参った！」

杉田「判ったか！」

鉄男「判り申した」

杉田「今度は、わしが攻める」

と、鉄男の短刀と、自分の小太刀を交換する。

こうして5分ほど練習を。

鉄男、大きく息を弾ませて、

鉄男「殿、しばらく、しばらく！」

と、ベンチに座り込んでしまう。

ハアハア大息をつく鉄男。

涼しい顔の杉田。

杉田「実際の戦ともなれば、果たし合いの間合いは、せいぜい長くて5分。
それ以上長くなると、息継ぎが乱れて相手に付け込まれる。
ゆえに、時々間合いを広げて、息を整えるのじゃ。
小太刀なればこそ、少し長く立ち合いもで

きようが、大刀ともなれば、その重さ故、
3分が限度。
息を案分したほうの勝ちじゃ。
覚えておけ」
鉄男「ははっ」
静「少しお休みなされませ」
と盆に湯飲みを下げてくる。
杉田もベンチに座る。
杉田「小太刀の鍛錬も、相手がいなくて困って居った。
よくぞ来てくれた。
嬉しいぞよ、岡田」
鉄男「御勿体のうございます、殿」
それぞれに湯飲みを渡す静。
静「ほんとによくいらっしゃって下さいました。
この人は、練習相手にわたくしまで狩り出す始末。
ほとほと困って居りましたから」

休みが終わると、

杉田「さて、今度は真剣の練習だ」

と、家の中から真剣の小太刀とナイフを
下げてくる．

杉田「まず手本にわしが小太刀、そなたが
ナイフ」

杉田、腰に小太刀を落とす．

鉄男、右手にナイフ．

ためらう鉄男．

鉄男「殿、恐ろしゅうございます．
万一にも、御身を傷つけましたら・・・」

杉田「左様、怖くて当たり前．
それゆえの鍛錬じゃ．
模造刀とは違い、双方の間合いは、切っ先
から片腕程度離れて、切ったつもり、差し
たつもりの鍛錬．
判ったか」

鉄男「判りました」

杉田「最初、ゆっくり動いて、相手の所作を
読み取るのじゃ」

鉄男、ゆっくり動いて間合いを詰め、さらにゆっくりナイフを振り下ろす。

杉田、鉄男の右に回転して、肘を切り裂くつもり。

一旦離れる2人。

今度は鉄男がナイフで小太刀を跳ね上げる。

チャリンッという音。

杉田が小太刀で正面から襲う。

鉄男、ナイフでそれを受け止め、鍔迫り合いとなる。

杉田「待て。
そのまま待て。
このような鍔迫り合いは、力任せに争っては危ない。
この場は一旦離れるのじゃ」

と、一歩跳び退る。

そして今度は鉄男の左に回転して、離れたところから鉄男の首筋を襲う所作。

鉄男、ドッと汗が湧き出す。

震えが止まらない。

鉄男「殿、しばらく、しばらく」

杉田「どうじゃ、怖いじゃろう。

それゆえ真剣の立ち合いは必要なのじゃ」

と、その時、杉田と鉄男の携帯電話が

同時に鳴り始める。

杉田「危機管理！」

鉄男「同じく」

杉田「ふん、なになに」

鉄男「えっ！

はい、わかりました。

すぐ伺います」

鉄男「殿、マーズ51号の乗組員が人質に捕

らわれたそうです」

杉田「こちらも同じ内容だ」

鉄男「殿、ご一緒下さりますか」

杉田、頷く。

鉄男、湯飲みの茶を飲み干して

鉄男「奥方様、美味しゅうございました・
では、殿、失礼して」
鉄男、杉田と腕を組み、テレポート・

○市の通信室

突然現れる二人。
杉田「これは面妖な！
なんというあやかしぞ！
これがテレポーテーションか。
一瞬気を失ったかに思えたが・・・」
市長「よくいらしてくださいました。
事態が切迫しておりますので早速に」
ローリン「では、1時間前の画像を」

○マーズ号ホイール操縦室

メカニックのロペールが頭を抱えて
蹲（うずくま）っている。
妻アナベルが彼の背中を擦っている。
呻くロベール。
船長「どうだ、痛むか」

ロベール「・・・ええ」

船長「困ったなあ。

歯の治療は、医務室でないとできないし。

鎮痛剤もそこに有るし」

ニック「医務室はホイールの反対側。

そこはドブゾロフに占領されている」

突然、ロベール立ち上がり、

ロベール「もう我慢が出来ん！

死んでもいいから医務室へ行く！」

というなり、隣のルームＡへの隔壁に

近づき、ロックを解除。

○ルームＡ

アナベル「あなた！」

続いて彼女も隣室に入ってくる。

○ホイールの回廊

そうして、隔壁をいくつもくぐりながら、資材庫Ｂまで行き着く。

○資材庫B

ロベール、ルームCの隔壁のロックを外して中へ入る。

○ルームC

そこで警戒中の兵士に見つかる。
ロベールは、それをすり抜けて、資材庫Cへのレバーを倒し医務室へ。
3人の兵士の内、2人が後を追う。
一人の兵士がアナベルを捕まえる。
そのとき後を追ってきたニックが入ってくる。
すぐロシア兵に見つかる。
あわててニックは資材庫Bに引き返し隔壁のロックを掛ける。

○医務室

レバーを押して入ってきたロベール。
薬の入った引き出しを物色。
鎮痛剤を捜す。

その時、2人の兵士が追いついて、ロベールを取り押さえる。

さらにアナベルを連れたもう一人の兵士も。

5人は二組に分かれてスポークの入口から、着陸船へ。

○着陸船操縦室

スポークから連れ出されたロベールとアナベル。

イワノビッチがホイールとの通信回線を開く。

イワノビッチ「マーズ51号の諸君。
ご覧の通り、君たちの仲間を2人捕らえた。
こうなれば2人も6人も同じこと。
降伏しろ」

船長の声が響く。

船長「降伏はしない。
2人を解放しなさい」

イワノビッチ「どうも状況が飲み込めていないな

いようだ。
おい、男を殺れ」

直後、兵士2人がロベールを押さえ。
兵士の一人がナイフでロペールの胸を刺す。
ロベールは血を吐きながら空中を漂う。
アナベルの悲痛な叫び。
はき出された血が空中を漂う。

イワノビッチ「参ったな。
おい、そいつの傷口と口を覆え。
そこら中血だらけになる」

兵士たちが黒シャツを脱いで傷口を押さえ、さらに空中の血の球を吸い取らせる。

イワノビッチ「君たちが彼を殺したんだ。
今しばらくの猶予を与える。
おい、死体をエアロックから外へ放り出せ。
やかましいから女を下へ連れていけ。
女はお前たち自由にしていい」

二人の兵士がロベールの死体を引き摺
ってマーズ51号着陸船のエアロッ
クの通路へ。
イワノビッチ、通信を遮断。
一人残った副官が。

副官「火星に着いても使える武器は拳銃20
丁と弾丸5000発。これで足りるでしょ
うか」

イワノビッチ「火星のインフラは我々にとっ
て貴重な資源だ。
我々に、破壊されたインフラの再建など不
可能だから、人は殺しても、インフラはそ
のまま。
これがドブゾロフ閣下の指令だ。
だから、爆薬もミサイルも無い」

〇東キャナル市庁舎・通信室

ホール「こういうわけでお二人に来ていただ
きました。
悔しいですが、ロベールは殺され、アナベ

ルは、ホイールで男たちにレイプされ続けて居る模様です。
なんとかアナベルを助けたいと」
杉田「うぬ、女をいたぶるとは鬼畜の振る舞い。
許せぬ、断じて許せぬ。
いざ、参ろうぞ」
ローリン「幸い、マーズ・シャトルが発射準備が整った模様です。
岡田さん、出発できますか？」
鉄男「はい、いつでも」

○東キャナル宇宙空港

三角翼のマーズ・シャトルを乗せたロケットが立っている
そこで一同がやってくる。
船内宇宙服を着た３人。

鉄男「あれ？
あの２本のロケット・ブースターは！」
ホール「そうです。

マーズ号に積まれていた貨物船です。
まだまだ現役のロケットの再利用です」
鉄男「なるほど」
ジェシー「やあ、テッツオ。
きのうはキャリーが世話になった。
ありがとう」
鉄男「いやなに。
今日は君の操縦か？」
ジェシー「いや、メインパイロットは、この
ユーアン・フラナリー（29）だ」
ユーアン「どうぞよろしく」
鉄男「ああ、こちらこそ。
岡田と申します」
ジェシー「じゃあ、こちらの昇降機から乗船
してくれ」
こうして3人が登ろうとすると、杉田
も後に続こうとする．
ホール「あ、杉田先生、あなたはここで」
杉田「なに、わしが行かんでなんとする」
ホール「あの、先生は今年の健康診断で引っ

かかっております．
とてものことに乗船は適いません」
杉田「わしは、いつ死んでもかまわん．
覚悟はできている」
ホール「そうは申しましても・・・」
鉄男「殿、ここは殿に後詰めをお願いしとう
ございます．
拙者が宇宙でドブゾロフの一味に討たれて
しまっては、火星を守る人が居なくなりま
する．
殿がここにいらっしゃればこそ、拙者は
心置きなく戦えると存じまする」
杉田「そう言われれば是非もない．
わかった．
わしはここに残ろう．
くれぐれも心を静めて戦うのじゃぞ．
頭に血が登っては、まともに働けぬからの．
おう、そうじゃ、このひと振り、予備の
小太刀じゃ、持って行け」
と、腰のひと振りを鉄男に渡す．

静「岡田さん、2本の刀をここへ」

と持ってきた風呂敷を広げる。

中には真綿の薄い布団が。

鉄男から渡された小太刀と、杉田の

小太刀をまとめて布団に包み、風呂敷

でまとめ、鉄男へ。

鉄男「有難き倖せ…

それでは、御免」

と3人してシャトルの昇降機へ。

その場の人間はホバーで遠く離れた

監視塔へ。

〇マーズ・シャトル操縦席

ユーアン「岡田さん、あなたについてはいろ

いろ噂が取りざたされてますけど、直にお

会いできるとは」

鉄男「たいした人間じゃないですから、気に

しないでください」

ジェシー「あ、カウントダウンが始まった。

テッツオ、大丈夫かい」

鉄男「緊張してます。
なにしろロケットは初めてだから」
ジェシー「火星は重力が少ないから3Gぐらいの加重。
それでも、なんの訓練もできていない君には相当の負担になると思う。
なんとか耐えてくれ」
鉄男「マーズ51号が見えてれば直接跳べるんだけど」
ジェシー「もしかしたら乗組員全員をこの船で助けないといけないかもしれないから、やはりこの船が要る」
鉄男「そうだ」
ジェシー「さあ、出発だ」

○東キャナル宇宙空港

ランチャーからマーズ・シャトルが切り離されてエンジンが火を噴く。
たちまち緑色の大空へ吸い込まれてゆくシャトル。

次第に東の空へ航路を傾け、オリンポス山の上を登ってゆく.

○火星大気圏外

ブースターが切り離され、シャトルを乗せたロケットのエンジンが始動.

ぐいぐいと漆黒の宇宙へ.

そしてメインロケットも切り離され、三角翼のシャトルだけになる.

○シャトル操縦席

鉄男、ヘルメットを取り、大息をつく.

鉄男「ああ、苦しかった.

食べたものが出てきそうだった」

ジェシー「よく耐えたね」

二人のパイロットの肩越しに船窓から宇宙を覗く鉄男.

鉄男「マーズ51号はどのへんに?」

ユーアン「ここから9万kmの位置.

まだ肉眼では見えない.

このモニターでは点で表示されている」

モニターの中央に赤い点が表示されている．

鉄男「シャトルはまっすぐ51号に向いているんですね」

フラナリー「そうです」

鉄男「51号はいつ頃火星に」

ジェシー「今逆噴射して減速しているから、おおよそあと1週間で着く」

鉄男「それまでに乗組員を助けないと．テレポートしましょう」

ユーアン「なんだって？」

ジェシー「ユーアン、実はこの人はテレポーテーションが出来るんだ」

ユーアン「えっ？」

ジェシー「瞬間移動」

ユーアン「噂の真相はそれだったのか！」

鉄男「目標にできるものが無いから、おおよそで跳んでみます．いいですか」

鉄男、前の二人の肩に手を置いて、前方を睨む。

次の瞬間、機体が揺らいだかと思うと、前方になにか光るものが。

ジェシー「マーズ51号だ」

ユーアン「なんということだ！」

ジェシー「おおよそ1800km」

鉄男「もう一度」

再度テレポート。

そして気づくと。すぐそこにマーズ51号が。

ユーアンは口をアングリ開けて驚いている。

鉄男「ドブゾロフのリーダーは着陸船の操縦室に居るんでしたね」

ジェシー「最後に見たビデオではそうだったが」

鉄男「ホイールの操縦室にだけ通信できますか？」

ジェシー「うん、極秘通信帯（ナロウバンド）を使えば」

鉄男「この船は、ホイールにドッキングできますか？」

ユーアン「できます。
　この天井の隔壁からエアロックへ」

鉄男「じゃあ、エアロックから乗船すると、船長に連絡して下さい」

ジェシー「わかった」

　ジェシー、オレンジ色のスイッチを入れる。

ジェシー「マーズ51号、マーズ51号」

　しばらくしてモニターに船長の姿が映し出される。

船長「え？
　どなたですか？」

ジェシー「マーズ・シャトル号のジェシー・ダグラスと申します。
　いま貴船のすぐそばに来ています。
　ホイールのエアロックは、ドブゾロフに占領されていますか？」

船長「いいえ、こちらの領域（テリトリー）です」

ジェシー「ホイールの回転を一時止めてください。
そちらにドッキングしますから」
船長「なんですって！
こりゃあたいへんだ。
ほんとなんですね？」
ジェシー「ほんとです。
船外カメラで確認してください」
船長、カメラのハンドルレバーを回す。
船長「ほんとだ！
ありがたい。
今準備します」

○マーズ51号の浮かぶ宇宙
ホイールの回転が止まる。
シャトルが姿勢制御エンジンを吹かしてホイールのエアロックに近づく。
やがて上部をエアロックに近づけて、ドッキング。
と同時にホイールが回転し始める。

○マーズ・シャトル操縦席

鉄男「じゃあ、行ってきます」

御二人はくれぐれもここを動かないように。準備が整い次第、51号の乗組員を乗船させる可能性がありますから」

次の瞬間、小太刀の包みを抱いた鉄男の姿は消える。

フラナリー「オー・マイ・ゴッド！」

○51号ホイール操縦室

突然刀の入った風呂敷を下げて、鉄男現れる。

船長「や！　何者！」

鉄男「先程連絡したマーズ・シャトルの者です。初めまして、岡田鉄男と申します」

船長「は！」

鉄男「驚かれたと思います。テレポーテーションです」

　と、船内宇宙服を脱いでゆく。
ニック「まさか！」
船長「船長の渡辺です。
　こちらはパイロットのニック・フォード」
鉄男「すみません、捕らわれている女性は
　どの部屋に居るのですか？」
船長「多分、着陸船と直にスポークで通じて
　いる医務室だと思います」
鉄男「生きていますか？」
船長「判りません。
　最初泣き叫んでいたのですが、ふっつりと
　声がしなくなりました」
鉄男「ともかく医務室へテレポートしてみま
　す」
　鉄男、風呂敷を解いて、一本の小太刀
を取り出し、左腰に差す。
　試しに左手の親指で鯉口を切り、右手
で刀身を抜く。
　重さを確かめるように、何度も握りな
おす。

するると、鉄男の体が小刻みに震え始める。

鉄男「怖い！
ほんとうに怖い！」

船長「大丈夫ですか？」

鉄男「大丈夫じゃないです。
（ガタガタ震えながら）こんなに怖いとは」

タマラが紙コップに一杯の水を差し出す。

鉄男「ああ、ありがとう」

と、一気に飲んでしまう。

鉄男「私はいままで喧嘩一つしたことが無いのに、今は人を切らねばならない」

鉄男、刀を鞘に納め、深呼吸を。

船長、タマラと春を呼び寄せ、なにやら耳打ちを。

うなづく二人。

二人は鉄男に近づき、それぞれ鉄男を抱きしめる。

驚く鉄男。

するとショックで震えが収まる．

鉄男「すみません、私のためにお気遣いさせてしまって．
もう大丈夫です．
じゃ、行ってきます」

ニック「医務室の位置を知っていますか？」

鉄男「ええ、2か月暮らしましたから」

かき消える鉄男．

○医務室

治療台に半裸のアナベルが横たわり、その上にロシア兵が下着を脱いで覆いかぶさっている．

アナベルはコソとも動かない．

現れた鉄男、治療台に駆け寄り、小太刀を抜いてロシア兵の首の延髄に深々と突き刺す．

切っ先は喉にまで達し、大量の血が噴き出て、アナベルの体を濡らす．

鉄男、ロシア兵の体を床に転がす．

続いて、3歩ほど後ろに居たもう一人のロシア兵に向かう．

ロシア兵はスラックスが下に落ちた状態．

ロシア兵、かがんでベルトのナイフを抜いて、下から鉄男に立ち向かう．

鉄男、半回転してロシア兵の右に至り、その右肘の腱を断ち切る．

ロシア兵の右手からナイフが落ちる．

鉄男、さらにとどめを刺す．

鉄男、自らの左肘の間に小太刀の峰を置き、ポロシャツの生地で血糊を拭い、鞘に収める．

さらに二人のロシア兵のナイフを拾い背中の帯の間に差す．

そしてアナベルに近づく．

鉄男「あなた、大丈夫ですか？」

アナベル、瞳を見開いて答えようとするが声にならない．

鉄男、近くに吊るしてあった白衣を

取り、アナベルの体を覆う．

鉄男「今から操縦室に帰りましょう．
　ちょっと失礼」

鉄男、アナベルの首の下と足の膝に腕を入れ、持ち上げる．

そしてそのままテレポート．

○ホイール操縦室

ドサッと現れる二人．

部屋の４人、大声を出して駆け寄る．

鉄男、アナベルを長テーブルに横たえる．

タマラ「まあ、血だらけ．
　あなたどこを切られたの？」

鉄男「あの、ほとんど私が殺したロシア兵の
　血です．
　けど、速く洗ってあげたほうが」

タマラ「そうね、春さん手伝って」

春「はい」

二人してタマラを肩に担ぎ、シャワー

室へ．
ニック「岡田さん、あなたも血だらけだけど」
鉄男「いやぁ、私は大丈夫です．
それより、腹が減りました．
おにぎり貰っていいですか？」
と、隣の資材室へ行こうとする．
ニック「ああ、そのままで．
私が取ってきます」
と、隔壁のロックを解いて隣室へ．
暫くして食材を抱えて戻って来る．
鉄男「ほんとにありがとう．
えーっと、おにぎり2個と卵スープ、
これはありがたい。
じゃ、遠慮なく」
と猛然と食べ始める。
船長とニックは驚いた面持ち。
そこへシャワー室から3人が帰ってくる。
アナベルの体はシーツで覆われている。

食べ終わった鉄男、食材をかたずけ、長テーブルを空ける。

春が寝室からマットレスを持って来て、その上に敷き、アナベルを横たえる。

タマラ、もう1枚のシーツをアナベルの上に被せる。

タマラ「あなた、室温を24度に上げて」

ニック「わかった」

タマラ「春さん、このシーツの端を持ち上げていて。
診察するから」

春「ええ」

持ちあげられたシーツの影で診察するタマラ。

時折、アナベルの苦痛の声が。

タマラ「ひどいわね。
あいつ等なんてことを。
岡田さん、お願いがあるんだけれど」

鉄男「はい、なんでしょう」

タマラ「医務室へ戻って、救急バッグを取っ

て来てほしいの」

鉄男「はい。
それはどこにあるんですか？」

タマラ「薬品戸棚の下。
白い大きなバッグで赤十字のマークが」

鉄男「ああ、思い出しました。
行ってきます」

姿を消す鉄男。

○医務室

現れた鉄男。
もう一人のロシア兵が、かがんで仲間の死体を見分中。
気づいたロシア兵は立ち上がり、ナイフを抜いて襲ってくる。
鉄男、一瞬よけ損ない、ナイフが鉄男の左頬を。
臆せず、鉄男は小太刀を抜き、一歩下がる。
肉薄するロシア兵。

鉄男、ロシア兵の真後ろへテレポート．
腰を屈めて、ロシア兵の右アキレス健を切り裂く．
ロシア兵、もんどりうって倒れる．
鉄男、ロシア兵のナイフを握った右手
思い切り踏みつける．
骨の折れる音．
馬乗りになって、首を切り裂く鉄男．
敵のナイフを奪い、やはり背中の帯に．
すぐに救急バックを持ってテレポート．

○ホイール操縦室
現れる鉄男、長テーブルにバッグを置く．
タマラ「まあ、岡田さん、血が」
鉄男「ええ？」
タマラ「頬に」
鉄男、両の頬に触る．
手に血が．
鉄男「ああ、そんなに痛くないです」

タマラ「そお、じゃ後で見ましょう．
男の人たち、隣の部屋へ行ってください．
アナベルの手当てをしますから」
言いながら、アナベルに点滴を始める．
男たち頷いて、隔壁へ．
鉄男、もう一本の小太刀を抱える．

○エアロック
男たち3人入ってくる．
船長「岡田さん、すみません．
危ないい思いをさせて」
鉄男「いいえ．
でもこれでお仕舞ではありませんよね」
船長「何人倒したのですか？　」
鉄男「3人です．
船長「じゃ、あと6人」
船長、ニック、大きなため息．
ニック「私たちが戦えたらなあ」
鉄男「それは駄目です．
どちらが欠けてもマーズ号は維持できな

い」

鉄男、背から3本のナイフを抜いて、テーブルに、もう一本の小太刀と共に並べる。

鉄男「万一、敵が隔壁を越えてきたら、その時は仕方ない。

あなたがたは、これらの刃物で立ち向かうほかない。

そうはならないよう戦いますけど」

船長「何としてでも、あいつ等を火星に着陸させてはならない。

さて、それで・・・」

鉄男「ここの床に、シャトルがドッキングしているのはご存じですね」

船長「ええ、さっきの連絡で」

鉄男「ロシア兵を全員倒したら、着陸船で火星を目指しますが、そうならなかったときは全員、シャトルで脱出します。

あ、そうだ」

鉄男は床のカーペットを取り除き、隔

壁を露（あらわ）にする。
さらに緑のランプを確かめてレバーを倒し、エアロックを解放する。
エアロックに入る鉄男。
隔壁を叩き、大声で呼びかける。

鉄男「ジェシー！　ジェシー！」

暫くしてシャトルの隔壁が開く。
見上げているジェシーとフラナリー。

鉄男「そっちの酸素供給を止めて」

ジェシー「お、そうだ。
しばらくはそちらの酸素をもらうんだな」

鉄男「そう。
もし、ロシア兵がこの部屋に乱入したら、
すぐ隔壁を閉じてマーズ母船から離れて」

ジェシー「わかった。
テッツオ、怪我しているようだが、大丈夫
か？」

鉄男「うん、かすり傷だ。
じゃあ待機していてくれ」

エアロックの外に出る鉄男。

と、そのとき、壁に立っているＡＩロボットを見付ける．

ロボットに話しかける鉄男．

鉄男「君は、もしかしたらアイオンか？」

アイオン「そうです」

鉄男「私が判るか？」

リンカーン「テッツオさんですね」

鉄男「なんだって！百年前のことも覚えているのか！」

リンカーン「記憶は日々アップデートされていますが、古い記憶が消えることはありません．常に別のメモリーにコピーし続けています」

鉄男「そういゃあ、君はしゃべれなかったよね、百年前」

リンカーン「はい、２０５３年にしゃべれるようになりました」

鉄男「へえ、すごいな．あっ、船長さん、アイオンはロシア兵と戦

えますか？」
船長「ああ、なるほど．
そういう手もあったか」
ニック「でも、あのアシモフの3原則が」
船長「えっ？
ああ、そうか．
第一原則と第二原則か」
鉄男「なんですか？」
船長「ロボットは人間を攻撃してはならない．
そしてそれに反しない限り人間の命令に従わなければならないってやつだ．
どちらにしても人間を傷つけてはならな
いってことだ」
鉄男「じゃ使えない」
アイオン「ロシア兵とはなんですか」
ニック「この岡田鉄男君を殺そうとする連中
だ」
アイオン「そんな人がいるのですか」
ニック「いるんだ」
鉄男「ところでどこまでロシア兵を阻止して

るのですか？」
船長「ルームCと、それからルームEです」
鉄男「判りました。ルームCとEですね」
言うなり鉄男はテレポート

○ルームC
2人のロシア兵が隔壁の壁の左右に
座っている。
そこへ突然鉄男が現れる。
驚きの叫びをあげる2人。
立ち上がり、それぞれナイフを抜いて
身構える。
鉄男、小太刀の鯉口を切り、2人を睨
み据える。
2人のロシア兵はお互い目配せして、
ナイフを両手で胸に構え、脱兎のごと
く鉄男に襲い掛かる。
2人の切っ先が鉄男に触れるか触れ
ないかの瞬間、鉄男は前方へ。
思い余って2人のナイフは、味方の体

へ深々と．

右の男は心臓と肺を突かれて、血が噴き出す．

左の男は肺を切り裂かれて、血の泡を口から吹きながらゼイゼイと．

暫くして2人はこと切れる．

次いで、鉄男はルームEへ．

○ルームE

2人のロシア兵は、一人は資材庫Dの隔壁の前．

一人は反対側の隔壁の前．

2人は、ビーフジャーキーを食いちぎっていた．

そこへ鉄男が現れる．

一瞬アングリと口を開き、驚いた様子．

次いで2人は鉄男に襲い掛かってくる．

鉄男刀を抜き放ち、まず杉田の教えの通り、第一の男の左へ、円弧を描き移

動．

すぐさま、その男の右肘の腱を切り裂く．

男は叫びながら膝を突く．

ポトンとナイフが落ちる．

鉄男、かがんだ男の背後から、首の筋肉を斬り断つ．

そこへ2人目のロシア兵のナイフが鉄男の左わき腹に．

一瞬呼吸が止まる鉄男．

振り向きざま、ロシア兵の右目に深々と小太刀を突き刺す。

鉄男「いかん．
これはいかん」

息ができない鉄男．

必死の思いでテレポート．

○ホイール・エアロック

突然現れて床に倒れる鉄男．

船長「おお、これは！」

ニック「まず血を止めましょう」

手で傷口を強く圧迫。

船長、操縦室へ駆ける。

○ホイール操縦室

タマラがアナベルの傷口を縫ったあと、
さらに消毒をしている。
駆け込んでくる船長。

船長「タマラ、岡田さんがやられた！」

タマラ「ええ？
たいへん、ここへ連れてきて」

言いながら、アナベルにシーツを纏わ
せ、点滴ポールを移動させながら春と
ともにアナベルをベッドルームへ。
ベッドルームに横たえたあと布団
を掛ける。

タマラ「春、様子を見ていてね。
局所麻酔が効いているから、しばらくは大
丈夫だと思うけど」

春「ええ、判りました」

と、アナベルの髪を優しく撫でる。

そこへ、ニックと船長に担がれた鉄男が入ってくる。

タマラ「そこへ寝かせて」

二人して長テーブルに鉄男を横たえる。

タマラ「この人も血だらけで、どこが患部かわからない」

と言いつつ、鉄男のポロシャツをはさみで切り裂いてゆく。

そこで左わき腹の刺し傷を発見。

周りの血を拭い、消毒液を吹き付け、局所麻酔を打つ。

さらに糸と針を用意し、傷口を縫ってゆく。

呻く鉄男。

タマラ「ごめんね。はやく血を止めないといけないので、麻酔の利くのを待ってられないから」

縫合の終わった傷口に消毒液を掛け。

15cm四方の包帯で覆い、井桁状に

テープて止める。
さらに鉄男の胴を包帯で巻く。

タマラ「まさか宇宙に来てまでこれほどの血を見ようとは思わなかった。
フゥー」

船長「ご苦労さん。
アナベルの方は大丈夫？」

タマラ「性器の裂傷に、子宮の破壊、所かまわず噛み傷。
あいつら、獣よ。
人間じゃないわ。
当分私も眠れないわ」

船長「そうか、そうだったのか。
最愛のロベールを失い、レイプの記憶を引き摺りながら、これからのアナベルの一生は地獄だな」

タマラ「そうね」

隣ではニックが目に涙を。

鉄男「先生、もう終わりましたか」

タマラ「ええ、終わったわ。

傷が浅くてよかった.
大腸には達していない」
鉄男「それでも少し痛いですよ」
タマラ「そうね」
鉄男「どのくらいで効いてきますか?
麻酔」
タマラ「もうすぐよ.
今からなにしょうって言うの」
鉄男「あと2人残っています、ロシアの鬼が」
タマラ「それは・・・」
鉄男「なんとしてでも、あいつらを火星に上陸させてはいけないから」
タマラ「・・・・」
そのとき、ゴオッという振動が.
船長「やりやがったな.
着陸船の離脱準備が始まった!」
鉄男「いかん!」
すぐさま鉄男、長テーブルから降りて、
抜き身の小太刀の血糊を傍のタオルで拭い、鞘に収め、腰に差す.

タマラ「裸でどうしょうと言うのです」
鉄男「今から行ってきます。
　何としてでも止めないと」
　　かき消える鉄男。

○医務室

　現れる鉄男。
　再び室内を見分し、スポーク入口の隔
　壁へ。
　その時スピーカーから音声が。
スピーカー「着陸船離脱準備完了しました。
　スポーク内にいる人はすぐホイールへ移動
　してください。
　隔壁がロックされます」
　鉄男、レバーを倒そうとしたが、ロッ
　クされていて開かない。
　そして着陸船が離脱する音‥
　鉄男、エアロックへテレポート。

○ホイール・エアロック

エアロックの入口に船長が立っている．

鉄男「だめでした．
出た後だった」

船長「そうでしたか．
私は今から地球と火星に報告をします」

鉄男「そうですか．
じゃ、私はロシア兵の死体を外へ放出して
しまいます」

船長「そうですね．
そのほうがいいですね」

そこへ春がポロシャツを持ってくる．

春「さあ、どうぞ．
裸では痛々しくって．
傷口、血が滲んでますけど、大丈夫ですか？」

鉄男「麻酔が効いてきましたから．
あの、廃棄物の放出口もここでしたね」

ニック「ここです」

と言いながら、床の70cm×50c
mの扉を指し示す．

鉄男「お願いがあります．

あの、床掃除のロボットクリーナーがありましたね．あの小さいやつ．それをルームCと、ルームE、医務室へ持ち込んで、床に流れた血をふき取ってもらいたいのです。血だらけのまま、マーズ母船を地球に帰すことはできませんから」

ニック「わかりました．早速やりましょう」

鉄男「じゃ私は死体をここに集めます．アイオン、手伝ってくれ」

とアイオンの腕を取りテレポート．

ものの3分もしないうちに、ロシア兵の遺体1体を抱えたアイオンとテレポートしてくる．

床に横たえたと思ったら再び消えて、さらに1体、続いて1体と．

○ルームE

最後の1体を抱え上げるアイオン．

鉄男「アイオン、ご苦労でした。
　これで終わりです。
　帰りましょう」
鉄男、アイオンの胴を抱えてテレポート。

○エアロック

戻ってくる鉄男とアイオン。
なんとそこには小太刀を持ったアナベルが、横に並べられたロシア兵の傍に立って、それぞれの股間に刃を突き立てていた。
鉄男「アナベルさん！」
声をかけても無我夢中で遺体を傷つけてゆくアナベル。
あわてて止めようと思った鉄男。
一瞬立ち止まり、考える。
鉄男M「この方がいいんだ、このほうが。
永いこれからの彼女の人生を思えば」
一体、また一体と突き刺すアナベル。
そして、最後の一体を刺し終わり、

その場にへたり込む彼女。
鉄男、近づいて、優しく小太刀を取り
上げ、血拭いして、近くに落ちていた
鞘に収める。

鉄男「さあ、戻りましょう」
彼女の腕を取って、操縦室への隔壁
ボタンを押す。

○ホイール操縦室
二人が入ってゆくと、振り向いた船長
が驚く。

船長「え？
寝てたんじゃなかったのか、彼女」

鉄男「ロシア兵の顔を睨みつけていました、
一人一人」

船長「そうか、そうだったのか」

鉄男「皆さんは？」

船長「血の掃除に分担して出かけた」

鉄男「そうですか。
それじゃ私は遺体を廃棄口からかたずけて

きます」

鉄男、アナベルの腕を支えて、ベッドルームへ誘う。

彼女を寝かせて掛け布団（コムフォーター）を掛ける。

鉄男「おとなしく寝てるんですよ」

アナベル、鉄男の目を見て頷く。

ドアは閉じずに

鉄男「時々見ていてくださいね」

船長「了解」

○エアロック

廃棄口横の緑のボタンを確かめて蓋を開け、一体の遺体を足から押し込む。

重力で遺体は排出扉まで落ちる。

蓋を閉じて、レバーを倒す。それと同時にランプが赤に変わり、遺体が滑り出てゆく音が。

赤に変わったボタンを押して、緑になるまで待って、さらにもう一体を押し込む。

黙々と作業を続ける鉄男。

○ホイール操縦室

鉄男が戻ってくると、全員がそこに帰って来ていた。

タマラ「すごい血だったわよ。

岡田さん、あなた強いのね」

鉄男「いいえ、運がよかっただけです」

あの、エアロックにも少し血が」

ニック「それは私が引き受けた」

とロボットクリーナーを抱えて隣室へ。

鉄男「船長、いつ頃奴らの着陸船は火星に」

船長「いつでも着陸に移れるんだが、砂嵐がひどくて、周回軌道で時間待ちしている」

鉄男「彼らは操縦の仕方を知っているんですか？」

船長「知らなくても、オートパイロットで着陸できる。

そのぐらいの知識はあったようだ」

タマラ「でも、二人だけで火星を乗っ取れる

んでしょうか？」

船長「まず無理だな。

奴らも寝なきゃいかんし、食事も、排泄も。

そんなとき我々火星人に襲われたら、一たまりもない」

鉄男「彼らが破れかぶれで、恐ろしいことをしないか心配です」

タマラ「そうよね」

と、タマラ、アナベルのベッドボックスへ。

扉を開けて声を掛ける。

タマラ「どう？　食事できそう？」

アナベル、首を横に振る。

タマラ「じゃ、栄養物の点滴ね」

応急バッグを空けて、点滴を取り出しポールに吊り下げ、新しい注射針を用意して、彼女の腕に刺す。

船長「さあ、我々はどうするか」

と、火星の地上を映すモニターを。

船長「砂嵐はまだ吹いている」

ちょうど帰ってきたニックが．

ニック「フェリーボートに乗り込む準備をします」

春「3食分くらいの食品も用意します」

船長「こんなときに何だけど、マーズ50号の修理をしないと．そのための部品をわざわざ運んで来たんだから、ニック、マーズ50号へ近づけてくれ」

ニック「半日は掛かりますけど」

船長「掛かっても仕方がない．大事な任務だから」

ニック「はい」

○2隻のマーズ母船が並ぶ宇宙．

双方のホイールが回転を止める．51号のフェリーボートが格納庫から離れ、50号に近づく．フェリーのエアロックからアイオンがボールベアリングを格納した厚みのあ

る板を持って、50号に接近．
着陸船を囲っていた円筒状の接合部に至り、板を鉄枠に仮止め．
不調な板を外して、新しい軸受け板を固定し、取り替えた板を抱えてフェリーに戻ってくる．
ニック、50号のホイール回転を指示．

ニック「大丈夫だ、治った」

フェリーを格納するニック．

○エアロック

船長「貨物ロケットを出発させる．大事なものがたくさん積んであるから」

と、発射スイッチを入れる．
振動がしばらく続いて発射されたことがわかる．
鉄男、入って来て、床下のジェシーに声を掛ける．

鉄男「着陸船は奪われてしまったから、フェリーをお願いします」

ジェシー「判った．
　さっきなにかごそごそやっていたけど、大丈夫か？」
鉄男「ロシア兵の遺体を放り出していたんだ．心配ない」
ジェシー「そうか．
　その頬の傷は？」
鉄男「ちょっとやられたけど、大丈夫．
　じゃ1時間後に」
（1時間後）
○ホイール操縦室
船長「リンカーン、後は頼んだよ」
リンカーン「はい、どうぞ気を付けて」
○フェリーボートの中
　7人の乗客が、シートに座っている．
フラナリー「皆さん、いいですか、出発しますよ」

○マーズ母船の浮かぶ宇宙

回転の止まった５１号ホイールから、
ジェットをふかして離れるシャトル．
１Ｋｍほど離れたとき、火星の赤道に
平行に進みだす．
角度をつけて大気圏に．
遥か彼方にオリンポス山が．
さらに下へ．
両翼の前のノズルから火を噴き減
速するフェリー．
どんどん地表が近づく．
前に広がるアマゾネス湖．
フェリーの腹から２列のフロートが．
機首を上向きに着水するフェリー、
水によってさらに減速されるフェリ
ー．
まるで水上スキーのように進む．
そして宇宙空港が見えてくる．
フェリーは、浮いたまま、空港前の砂
浜へ乗り上げる．

○フェリー内部

船長「見事だ」

ジェシー「フラナリーは何回も着陸に成功しているんですよ。私は初めてだけど」

船長「よかった、よかった。さあ、降りよう」

○フェリーの着いた砂浜

大型ホバーがやってくる。

市長や保安官、危機管理主幹が降りてくる。

市長「ああ、皆さんご苦労でした。たいへんなこともあったけど。アナベルさんは？」

船長、アナベルの背を押してやる。

市長「あなたがアナベルさん？お気の毒でした。気をしっかり持ってね。

困ったことがあったら言ってね」

アナベル、かすかに頷く。

ホール「岡田さん、ほんとにありがとう。
だけど、まだ気が抜けない。
マーズ51号の着陸船がさっき到着したん
だ、ほらあそこ」

1Kmほど先にまっすぐ立っている
51号着陸船。

鉄男「（二振りの小太刀の風呂敷を抱えなおし）
行きましょう。
私は絶対奴らを許さない」

と、歩き出す。
200mほど行くと何百人もの人の群
れが。
その中には、杉田やジョンがいた。

杉田「おう、よく戻ってきたな。
え？　そなた傷を負ったのか？」

鉄男「殿、ただいま戻りました。
傷は大したことはありません」

杉田「腹のところの着衣に血が」

鉄男「手当てはしてあります．
お気遣い召されませぬよう」

杉田「そうか．
それで、あの者たちを何とする」

と指し示すロケットの側面の開口部からエレベーターが地上に届き、

そこから２人のロシア兵が．

降り立った２人の手には拳銃が．

双眼鏡で覗く杉田．

杉田「カラシニコフの１５番だな．
マガジンには１４発の弾が入る．
かなり古い銃だ」

マーズ５１号をぐるりと取り巻く数百人の人々．

次第にその輪が縮められてゆく．

距離が１００ｍほどになった時、ロシア兵は群衆に向かって発砲し始める．

人々は後ずさりする．

１４発撃ち尽くした後、マガジンを交換するロシア兵．

杉田「あのマガジン交換がねらい目だな」
鉄男「そうですね」
装填し終わった2人のロシア兵．
二人はぐるりと群衆を睨みつける．
杉田「射程距離は最長50m．
この距離では届かない」
鉄男「なぜ射程距離の短い銃を」
杉田「おそらくロケットの性能が低く、重い
自動小銃は積めなかったんだろう．
自動小銃は、弾も格段に重いし」
そのとき、二人のロシア兵は向かい合
い、なにやら話している．
と思ったら、銃をお互いに向け発砲．
そして倒れる．
鉄男「あっ！」
群衆も恐る恐るにじり寄る．
杉田「哀れなものよのう．
かなわぬとみて自害しよった」
人々は駆け寄る．

○中央病院・病室

鉄男、ベットに座っている.
所在なさそうに窓の外を見る.
携帯電話が鳴る.
鉄男、電話を取り上げる.
ローリン「岡田さん、お加減いかが？　」
鉄男「ああ、ローリンさん.
大丈夫です」
ローリン「そう.
実は君に知らせておきたいことがあって.
今、いいかね？　」
鉄男「ええ」
ローリン「実は地球ではドブゾロフとフリーダムとの宇宙戦争が始まっている.
国際宇宙ステーションも破壊された.
そこでマーズ号の帰還はやめたほうがいいと火星協会が決定した.
このことは東キャナル市にも知らせが入ったが、市民には暫く伏せておくことになった.

君にだけは話しておく．
私の独断だがね．
だから、他の人には話さないで．
わかった？」
鉄男「わかりました．
悲しいですね」
ローリン「そうだね．
このまま地球と断絶することになれば…．
まあ、そういうことだ．
体大切にね」
鉄男「ありがとうございました」
ローリン「じゃ」

そこへステフとキャリーが入ってくる．

ステフ「どお？
担当医から経過はいいと聞いたけど」
鉄男「うん、まぁまぁだね．
ベットを降りるとき痛むけど」
キャリー「どこが痛いの？　」
鉄男「ここ」

と左わき腹を押さえる・

キャリー「ちょっと見せて」

とわき腹に触ろうとする・

鉄男「やめてくれ、頼むから」

キャリー「そんなに痛いの」

といたずらっぽく笑って触ろうとする・

ステフ「だめよ・
まだ治ってないんだから」

仕方なく手を引っ込めるキャリー・

そこへ病衣（ペイシェントガウン）を着たアナベルが入って
くる・

ステフを見て会釈する・

アナベル「こんにちは」

ステフ「はい、あの、どなたでしょう？」

アナベル「マーズ51号でこの方に助けてい
ただいたアナベル・ヴァルツと申します」

ステフ「ああ、あの・・・
大変な目に合ったわね・
その後大丈夫？」

アナベル「はい、なんとか」

ステフ「今日はお見舞いに？」
鉄男「毎日来てくれるんだよ．
自分の体そっちのけで．
自分も入院しているのに」
ステフ「まぁ」
キャリー「ダディ、指相撲しようよ」
アナベル「ダディ？、
お二人は結婚なさっているんですか？」
ステフ「いいえ、これには事情があるの」
鉄男「さあ、おいで」

と、キャリーの右手と自分の右手を重ねて
親指どおしを向かい合わせる．

鉄男「さあ、勝負だ」

キャリー、鉄男の指を上から押さえようとするが、鉄男、するりと指を離し、反対にキャリーの指を押さえようとする．
キャリーは体を離してそれを遮る．

鉄男「だめだよ、ズルしちゃあ」
キャリー「ズルじゃないよ」

と、今度は素早く鉄男の指を押さえる．
鉄男、わざとそのままにして負けてやる．
キャリー「ヤッホー、勝った、勝った！
ママ見てたでしょう」
ステフ「大きな声出さないの．
お見舞いに来たんだから．
さあ、テッツオも元気そうだし帰るわね」
鉄男「ありがとう」
ステフ「なにか要るものある？　」
鉄男「そうだな、ウィスキーかな」
ステフ「駄目なの判ってるでしょう．
さあ、キャリー、帰るわよ．
アナベルさん、どうぞお大事に」
アナベル「はい、ありがとう」
親子は病室を出てゆく．
アナベル、椅子を寄せて座る．
そして鉄男の顔をまじまじと見る．
鉄男「君、君も病人なんだから、ベッドに帰らなきゃ」

アナベル「一人でベッドにいると、あの時のことが思い出されて、苦しくなるんです．いっそこのまま死んでしまいたいと．あなたの傍にいると、安心できるんです．このまま生きていけそうな・・・」

鉄男「そう・・・．それなら」

そのときタマラが入ってくる．

タマラ「やっぱりここね．あんまり動き回ると傷の治りが遅くなるのよ．自分の病室にお帰りなさい」

タマラ、下を向いて返事をしない．

鉄男「フォードさん、ちょっとお話が」

タマラ「なに？」

鉄男、痛さに顔をしかめながら、ベッドを降りてタマラの袖を引っ張って、廊下へ．

○鉄男の病室の前の廊下

鉄男「こんな御願いはルール違反とは知って
いるんですけど・・・．
あの、アナベルさんのベットを私の病室に
運んでいただけないでしょうか？」

タマラ「なんですって！
なに考えてるの」

鉄男「二人が入院して3日すぎてからアナベ
ルさんがここに来るようになりました．
聞くと、ここに居る方が安心できると．
一人でいると、あの忌まわしい経験に責め
さいなまれているのだそうです．
夫のロベールさんのことも思い出したくな
いそうです．
ですから・・・」

タマラ「男女が同じ病室っていうのは聞いた
ことがないわ．
でも・・・、そうね．
院長に相談してくるわ．
でも、くれぐれも、一緒の病室になっても
男女の関係にはならないでね．

彼女は、性交渉できるような状態ではない
から・
精神的にも、肉体的にも・
それは約束できる？」

鉄男「勿論ですとも・
そんなことをする男に見えますか？」

タマラ「でも、いつまでもこんなふうには
・・・・
そのことは考えた？」

鉄男「ええ」

タマラ「もしかしたら一生、二人の関係が続
くかもしれないとは？」

鉄男「考えました・
でも、それでもいいと思いました・
これは、愛でも恋でもなく、さみしい二人
が寄り添って生きてゆくことなんだと」

タマラ「判ったわ・
相談してくる・
あなたも歩き回らないでね」

鉄男「イエッサー！」

と敬礼する。

タマラ「賢いんだか、馬鹿なんだか」

と歩み去る。

○鉄男の病室

ドアが開いて、アナベルが寝ているベッドが看護師二人に押されてくる。

タマラ「どう？

気に入った？」

鉄男「ありがとう。

ちょうど話し相手が欲しかったところです」

タマラ「アナベル、あなたは？」

アナベル「気を使っていただいてすみません」

タマラ「いいのよ。

二人が元気で早く退院できるに越したことはないから」

二人のベットは平行に置かれる。

タマラ「じゃあね」

出てゆくタマラと看護師たち。

二人、顔を見つめ合って、無言。

鉄男「ああ、なんかいつもと違う。どうも・・・何というか・・・」

アナベル「不愉快？」

鉄男「いや、そうじゃなくて。なんかお尻がこそばゆいような」

ほほえむアナベル。

鉄男「あなたはどこの国から？」

アナベル「南アフリカよ」

鉄男「熱い国ですか？」

アナベル「ほとんどあなたの国、日本と同じくらい」

鉄男「なんだか熱い国だとばかり思ってました」

またしばらく会話が途切れる。

鉄男「あなたチェスはできますか？」

アナベル「ええ」

鉄男「やりましょう」

鉄男、手元のリモコンで正面のモニターを表示し、プログラムから（チェス）

　　を選ぶ。
　　すぐに駒が並べられた盤が。

鉄男「あなたは白ですよ」

アナベル「ええ」

　　二人は声で盤面を操作。
　　こうして二人は小一時間対戦。

鉄男「チェックメイト！」

アナベル「ちょっと待って。
　まだ私の番よ」

鉄男「え？　そう？」

アナベル「そう。
　じゃ、チェックメイト」

鉄男「そんな！
　そんなはずないけど」

アナベル「そんなはずがあるの。
　ほら」

　　とキングのそばにビショップを。

鉄男「ああ、ちょっと待って」

アナベル「ちょっと待っては無しよ」

鉄男「だって・・・。

そんなはずないんだけどな」

アナベル、やさしく微笑んでいる。

それを見て鉄男。

鉄男「ま、いいか。
名人上手でも負けることはある。
じゃ、もう一度」

そのとき院長の回診の一団がやってくる。」

ムベキ「やあ、楽しそうですね。
結構、結構。
でも少し休んで診療しましょうね。
ミランさん、二人のデータを取ってください」

ステフ「はい」

いいながら、二人の間のカーテンを引いて、まずアナベルを診療。

7分ぐらいで終わり、次は鉄男。

なんだか複雑な表情のステフ。

ステフ「楽しい？」

鉄男「ええ」

ステフ「（小さい声で耳元で）私とはチェスや
らなかったわね」

鉄男、笑いながら

鉄男「ええ、まぁね」

ステフ、傷口の絆創膏を思い切り剥が
す．

鉄男「おおっ、お手柔らかに」

ステフ「岡田さん、もう退院してもいいんじ
ゃないかしら」

ムベキ「どれどれ．
ああ、もう少しですね．
この傷口は辛抱がいりますよ．
じゃあ、また明日」

とみんなを引き連れて外へ．

戸が閉まって、しばらくして

アナベル「なんだかあの女先生、邪険だけど」

鉄男「そう？
そんなには感じなかったけどな．
じゃ続きを」

そうしてチェスを再開．

鉄男「ところでアナベルさん、あなたの緑色の瞳の訳は？」

アナベル「父がイギリス人で、母がソト族でその間に混血の私が生まれたから」

鉄男「そうだったの．ということは、育ったのは・・」

アナベル「イギリス」

鉄男「へえ、大変な人生だね」

アナベル「そうでもないわ．イギリスには黒人は多いのよ．さて、チェックメイト！」

鉄男「ええ！そんなはず・・・はずあった．あなた強いね」

アナベル「そう？」

鉄男「もうほかのゲームにしよう．私が勝てるようなやつ」

カメラはおだやかな二人を撮影しながら、後ろに引いてゆき、フェードアウト。

終わり